
夜の女神に愛を捧ぐ

山寺獄寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の女神に愛を捧ぐ

【Nコード】

N3874M

【作者名】

山寺獄寺

【あらすじ】

自ら愛する者を手に掛け、自らの終わりを望む男は死の寸前に何者かに喚ばれ異世界へと導かれる。

そこは、新たな闘いの舞台でもあった

ブログぐ終わりは始まり（前書き）

どうも山寺獄寺です。このサイトでの投稿は初めてですが、頑張
っていきます！！

プロローグ　終わりは始まり

あの日、あの時俺は我を失った。

今考えれば後悔の念が遣るが、だからといって赦されていい訳でも無いだろう。最初から解っていた事だ。そんなこともあるだろうと。八年前　彼女を、恋人を殺してしまったあの日から、いつかその事に耐え切れずに狂ってしまうことなんて。俺が彼等と共にあると決めた時から、俺という存在はことごとく破綻していたんだから。

他者の命を喰らうことでその記憶・知識・力を吸収し、自らの力とする特殊な精霊魔法を使う俺は明らかに異端者だった。

英雄の一人として名を連ね幾多の戦場を駆け抜けてきたものの、俺という存在は決して正義と呼べるモノではなかった。そのことに苦悩する日々が続いたが、そんな俺を見て赤髪の男は笑った。

「テメエがどんな風に周りから思われてても、俺達にとっては大切な仲間だ。他の誰もが　カンナギ　テメエ自身が自分を『悪』だと断じて俺達は認めてやるよ、神風　カンナギ　テメエは俺達『赤き翼』の一員だつてな」

そんな男の顔を見て俺も小さな笑みを返す。

多分あの男は知らないだろう。

屈託なく小さな子供のように笑うアイツのおかげで、俺がどれだけ救われたのか。今まで、忌み名として呼ばれてきた『魂喰』という名が誇らしくなるほどに。

俺の身体が赤くない場所は無いほど血に染まり、通ってきた路に死者の骸が重なり合い、苦しみに怨嗟の断末魔を漏らす。

俺は地獄に生きている。そうすれば俺の仲間達が余計な苦勞をせ

ずにすむ。

俺は『悪』を自認する。そうすれば、あいつらが世界を平和に導いてくれる。

そう信じていた。ライフメイカー結果、世界は偽りの平和を手に入れた。

最後の敵《造物主》は消え逝く間際、俺にしか聞こえないように呟いた。

「いつか貴様は我の対と成る　苦しみ・哀しみ・絶望の果ては常に醜いモノだ。貴様に耐えられるか？

いずれ、また会おうぞ《終焉王》デッドエンド」

ローブを深く被り仮面に顔を隠したその男の声色はどこか哀しみに満ちていた。

大戦を終え三年の月日が流れた。

世界そのものは復興に向けて着々と歩みを進めていたが未だに陰は残った。戦争孤児。小さな内乱。政治の混乱。彼等は英雄と讃えられる一方で、俺は怨みの対象となった。正義になるには人を殺しすぎた。英雄となるには狂気に染まりすぎた。

このまま彼等と共にいれば彼等もまた怨みの対象になるかもしれない。そう考えて俺と少女は彼等と離れ、二人旅に出ることにした。本来は俺一人で行くつもりだった。

修羅を歩むのは俺一人です。

「お前はついて来る必要は無いんだぞ。俺は幸せになるには人を殺しすぎた……これから修羅を進む。

お前は幸福を、平和を求める資格がある。俺と一緒にいたところで幸せになれる訳が無いぞ」

「貴方は本当に優しい人。貴方がどう言おうと私は着いていきますよ。私の幸福は貴方と共にあることですから」

俺と向き合う彼女は慈愛に満ちた優しい顔で微笑んでくれた。そ

のままゆっくりと近付いてくる。頭一つ小さい彼女の顔が俺を見上げ目元を綻ばせた。風にたなびく髪を抑えようとせず、ただ俺の目を真っ直ぐ見つめてくる。その目はどこまで行っても澄み切っていて眩しかった。

「他の誰もが貴方の敵であつたとしても、貴方は私のヒーローです」

気付けば抱きしめられていた。俺の無骨な身体に顔を埋め、必死に俺を包もうと俺の背中に腕を伸ばしてくる。

暖かい

そう思つた途端、何かが込み上げてきた。ただただ敵を、人を鬼を魔物を殺しつづけ、摩耗した俺の内側に優しい光が差し込むのを感じた。がんじがらめに縛る鎖をゆっくりと解き放ってくれた。頬を伝ふ感触で俺が涙を流していることに気付いた。

「俺は救われてもいいのか……」

ポツリ呟いた。

「貴方以上に救われなくてはならない人はいませんよ」

そう言つて今までよりも強く抱きしめてくる。

嬉しかった。ただただ嬉しかった。

止まらない涙を拭いもせずに抱きしめ返した。一瞬、俺の行動に驚いて身体を震わせたが、嬉しかったのか更には顔を俺の胸元に埋める。

「わりいな、しばらくこのままでもいいさせてくれ」

持てる力で強く抱きしめた。この暖かさを逃がしたくなくて。俺を救おうとしてくれる彼女を離したくなくて。

今考えるとそうとう痛かつただろう。けれど彼女は何も言わずに抱きしめていてくれた。そんな彼女が愛おしくて俺は静かにキスをした。驚いていたがどこことなく上機嫌な彼女。

爽やかな風が通り過ぎる。木々が俺達を祝福してくれるかのように葉を揺らし、精霊達が楽しそうに宙を舞う。俺も微笑んだ。

聖母の名を持つ彼女にこの日俺は救われたのだった

その日から俺は彼女と旅に出た。内乱状態の地域に出向き怪我人の治療に当たったり、偶然見掛けた孤児を連れて色んな所を見て回った。始めの内は少人数だったが、しばらくすると寢床を用意するのが難しくなった。

夜中二人で話し合い、孤児院を開くことにした。怨みの対象である俺が孤児院を開くのは問題があるように感じたが、子供達を育てたいという彼女の願いを無下にも出来ずに、流される形で孤児院を作ることにした。

幸せだった……

毎日楽しそうに子供達の世話をする彼女を眺め、俺は出来るだけ子供達から離れて経営を中心に行った。どうしても子供達と触れ合うには抵抗があった。俺は汚れているから。どれだけ彼女が笑ってくれても、子供達に触れようとした瞬間、俺の手の平が血に染まっている幻覚を見てしまう。しばらく考えていたが、結局諦めた。

俺は修羅、それは決して変えられない。ただ、この子達の明日を護りたい。だから、子供達の生活を遠巻きに眺めるだけにした。それだけで十分だった。

毎日が退屈で新鮮だった。争いもなく、血が流れる事もなく皆が笑顔だ。こんなにゆつたりとして暖かな日々は今までなかった、と俺が笑うと彼女も笑い返してくれた。

「私も幸せですよ。貴方がいて、子供達がいて、これ以上なんてないくらい幸せです」

その言葉に俺は再び笑んで虚空を見上げた。

英雄になれなかった俺には勿体ない程の幸福だった。そんなことなんてどうでもよくなるぐらいのんびりとした生活

少しずつ俺の心も癒え、荒れ果てた荒野に雨が降った。平穩という言葉が相応しい程に満ち足りていた。

けれど

長くは続かなかった。

八年前、俺は彼女を失った。いや、中途半端な懺悔はよそう。

俺が彼女を殺したんだ。

その時の事は今も脳裏に焼き付いて離れない。ただ、語りたい内容でもない。おそらく俺の胸の中にずっと残しておかなければならない楔。

結局、幸福の幕引きは絶望で 醜かった。

そして今、俺は何故か広大な更地に倒れている。もう欠片すら力が入らない。どうしてこんな所にいるんだろう。そう考えて気付いてしまった。

俺が喰ったんだと

あれから八年 結局、微塵も前に進めていないことに漸く気付かされた。何もない更地の上、どこまでも荒れ果てた大地が突き抜けていた。

「疲れた……」

ポツリ。砂煙舞う大地に一筋の恵み。されど俺を決して助けてはくれないんだろう。何とは無しにぼんやり辺りを見渡して、やっぱ

り何もないと溜息を漏らす。

どれだけ暴れたのか分からないが上着は布切れと化し、衣服としての役目など既に失っていた。無理矢理引きちぎった残骸を無造作に投げ捨て、剥き出しの大地に身を投げ出す。

「貴様は、どうするつもりだ？」

不意に声を掛けられた。大空を眺める俺の視界にはいないが、どうやら俺の様子を見に来たらしい。身体を起こし、相手を視界に収める。きらびやかな金髪に鋭い眼光。漆黒のドレス。いつもは自信に満ちあふれた態度だったが、今はどこも無く儚げだった。

憐憫、悲哀、苦悩。そんな感情が彼女の碧眼に模様を描き揺れていた。

彼女もまた俺と同じく化け物。理由も手段も覚悟も在り方も違うが、何故か重なうて見える。

「どうせ俺は死ねないしな　まあ生きてる訳でもないがな」
力無く笑う。

彼女から見た俺の姿はどう映っているのだろうか。

「それよりもお前は どうしてここに来た」　少しずつ激しくなっていく雨音。

「私か　貴様が出て行くなら私達も此処にいる必要はないからな……何処に旅にでも出るさ」

何かを期待しているような言葉。それに応える訳でもなく、そうか、とだけ呟いた。

「正直、疲れたよ……。所詮不老不死なんて無価値だな。死にたい時に死ねないなんて拷問以外の何物でもない」

操影術で左胸を突き刺すが、痛みすらなく、ただ衝撃だけが伝わってくるだけ。引き抜けば、見る見る内に再生し、細胞の成長に熱を発し傷口から溢れる血を蒸発させていく。

「最悪、自分で自分の魂喰ったら死ねるかなって思ってるよ」

そんな俺の言葉に彼女は目を閉じ、じっと何かに耐えていた。

「生きるつてのは辛いな……」

どこまでいっても俺は幸せになれないらしい。だったらこの先なんて生きる意味がない」

独白は続く。聴こえるのは俺の自嘲と雨粒が大地を叩く音だけ。

風もなく、世界の終わりを錯覚させる。

「俺自身力を持って生まれた事を後悔してはいない。力が無ければアイツの願いを叶えられなかった……けどな、たまに思うんだ。もしも力が無かったらもっと普通に平凡な生き方が出来たんじゃないかってな」

『もしも』なんて言葉が頭を過ぎる。けれど、あくまで起きなかったことだ。夢想で空想。だから、返事なんて必要もなく 答えなんて存在しない。俺の罪は俺が背負う。これ以上、俺に大切なモノは必要ない。

「エヴァ、お前にも大切なモノはあるだろう。それを護るのはお前にしか出来ないことだ」

ずっと何かを言いたそうなエヴァの腕を拒絶した。俺には勿体ないぐらいだ、まだ俺を救おうとしてくれる人がいる事は。そして俺という異端を必要としてくれるのは

まあ、今となっては遅すぎる。だから受け入れる訳にはいかない。エヴァも俺が拒絶するのが分かっていたのか拳を握り締め数瞬間俯き、そして天を仰いだ。

「もう会うことはないだろう。さらばだ、神風遊馬《終焉の魔法使い》」

「ああ、さよならだ。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル《闇の福音》よ」

最期にお前に会えて本当に良かった。

お互いに別れを告げ終わると、エヴァは無表情でそのまま去っていった。その頬を伝うのは雨だったのか涙だったのか、彼女がいなくなってしまう以上尋ねることは出来なかった。

「さてと、別れも済ませたことだし……どうなるか分かんが、や

つてみるか 『影よ』！！」

短い詠唱に影が波打つ。一本の槍と化したそれは首筋を抉るように切り裂き、大量の血を撒き散らす。しかし、その血は地面に落ちることなく宙を舞い、帯状の魔法陣を形成していく。

「解呪」

パキリ、と音を立て弾ける魔法陣と共に莫大な魔力が身体の奥から溢れ出す。自らの身体に異変がないことを確認すると、更に呪文を紡ぐ。

「ゲルド・ガン・デ・エン・トルテス

夜の女神、死の神ニユクスよ

我が盟約にて終わりなき魂に安息を！！其は終焉、死をもって世界を無に染めよ

『死の安らぎ』」

闇に包まれる感覚に俺は身を委ね、目を閉じた。別段、感慨に耽るような人生も歩んではない。ただ、自らの罪を受け入れる。

「そろそろか」

身体感覚が少しずつ薄れていく。同時に身体そのものも闇に溶けだす。痛みも何もない。ただ自分という存在が消えていく。ゆっくりと消化されているかのように身体の輪郭がぼやけていく。

「ん？」

何かが聴こえる。

< ！！ >

何もない世界のはずなのに確かに声が耳を打つ。

< 助けてください ！！ >

そう聴こえた刹那、俺の身体は完全に闇へと飲まれ意識を手放した。

プロローグ〈終わりは始まり（後書き）〉

とりあえずプロローグでした。いかがでしたでしょうか？

・予告・

自分を『幸せになつてはいけない人間』と位置付ける主人公。その悲哀を一番理解できるエヴァ。

そんな二人の別れの後、新たな物語は始まりの幕を開ける。

次回『新たな世界』

新たな世界へ闇が重なる・前（前書き）

頑張っ て連続投稿！

少し短いですがキリが良いのでここまでとします

新たな世界へ闇が重なる・前

死んだと思っていた。なのに、気付けば俺の身体は宙に浮いていた。

「……は？」

唖然としながらも、身体がゆっくりと重力に引かれ下降する感覚に急いで浮遊術を発動させる。

「危なかったな　ここは……？」

落下も止まり、落ち着いた所で辺りを見渡す。あまり寒さを感じないが町並みを見るとクリスマススムード漂う装飾に驚かされた。上半身裸にも関わらず寒くない。明らかに冬なのにだ。

ただ、気にならないので無視することにした。上空に浮かぶ俺の姿など誰も気付かないだろう。

装飾の文字から日本だろうとは思う。ただ、あまりにも見覚えのない街だ。実際、日本中を見た訳ではないがどこと無く違和感を覚えた。

更に視界を後ろに向けた所で気付いた。俺のすぐ後ろに女性が浮いていた。付き従うように浮かんでいた。黒のロングドレスに身を包んだ女性。腰まで伸びた色素の抜けきったような白髪。更に体温を全く感じない透き通るような白い肌。生気の抜けた意思のない紅い眼　西洋人形のような、研磨され完成された水晶のような。

明らかに人間ではないと分かる。

見覚えが無い訳ではない。むしろ良く知っている。ただ、当たり前のように此処にいるのが問題だ。

「何で出てきている、マリア？それから俺は死ななかったのか？」
「……完全、同調……消滅後、異世界転移……」

俺の問いにマリアはただそれだけ呟く。

相変わらず意思疎通が難しい。ただ、これ以上の回答は得られるはずも無いので、マリアの言葉をヒントに状況を考えるしかない。元々、こいつは俺と契約している精霊だ。いる事自体は不思議ではない。ただ、封印によって抑えて

そこまで考えた所である一つの結論が頭を過ぎる。正確には到ってしまった、というのが正しいだろう。最悪の結末だが。

「まさかとは思うが……俺自身を喰わせた事で俺とお前という存在が完全に堕ちたのか？」

コクリとただ、頭を下ろすマリアの姿に絶望を感じた。

「は、はは……なんだそれは。てことは俺はもう絶対に死ねないってことじゃないか」

思わず苦笑が漏れる。死ぬことが出来るかもしれない。そう考えて行った事が、俺自身を完全な化け物にしまった。自業自得なのだろうが、それでも辛いことには変わりがなかった。どうやら本当に俺という異端は救われられないらしい。死を救いと考えるのが正しいかと問われれば正しくはないだろう。ただ、そうなることを望んでいた身としては、やり切れない。

それでも今までの経験からなのか、思考は今の状況をとにかく把握しようと思まぐるしく動きつづける。

「異世界ってのは魔法界か？けど魔法界にはこんな場所はないぞ」

異世界という言葉で思いつくのは大戦の舞台となった因縁の地」

魔法界』。魔法を当たり前として存在させた結果、旧世界とは異なる進歩を続けた世界。空に浮く島、ドラゴン。ゲームの世界そのまの正にファンタジー。けれど、それにしても建物の外観なんかが普通過ぎる。そんな俺の疑問に小さく首を振る。

「……正確には平行世界……」

あらゆる可能性の枝分かれした果て。未来の可能性によって分岐し続ける『平行世界』。それが正しければ、先程の違和感も理解できる。俺のいた日本ではないということだろう。考えながらも先を促す。

「証拠は」

「……精霊が、いない……」

本当か？と尋ねるとコクリと頷いた。とはいえ信じられない。本来精霊は見えない以上『いない』と言われても確認が難しい。

「仕方ない、試すか。」

ゲルド・ガン・デ・エン・トルテス

来れ雷精、風の精！！

雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐」

右手を翳して呪文を唱えていくが、いつも通り魔力が右手に貯まっていけるを感じる。あまり得意ではない系統の魔法だが、あまり威力も無いので逆に確認しやすいだろう。

「『雷の暴風』　　！！」

詠唱を終えた瞬間、右手に集まっていた魔力がポンと音を立て霧散してしまった。あまりに間抜けな音に何となく笑ってしまった。

ただ、精霊がないというのは本当だろう。普通の失敗の場合ならこんな風にはならない。魔力が完全に空回りしている。燃料があっても動力部がない感じた。

「精霊がないのはお前を信じよう。何よりお前がいるんだから得意なのは可能なんだろう」

少し考えつつも頷くマリア。自分が精霊なんだからそれぐらいは即答してほしい。むしろ、精霊の中でも最上位である自覚を持つて欲しいところだ。

思わず溜め息の漏れる俺の姿にマリアは不思議そうに小首を傾げる。

「ここが平行世界と仮定してだ　何で俺達がそんな場所に飛ばされたんだ」

仮に平行世界だとすれば新たな疑問が残る。何故別の世界に飛ばされたのか、だ。ゲートのある魔法界と旧世界とは訳が違う。そもそも、完全に枝分かれしている二つの世界を渡るのは不可能なはずだ。確かに似たような世界なのかも知れないが、二つを繋ぐモノが存在しない以上、なにより異分子である俺達が渡れるはずがないのだ。

「……導かれた……」

そう呟いて俺の後ろの辺りを指を刺す。その刹那、タイミングを見計らったかのように莫大な魔力の奔流が背中越しに痛みを感じるほど伝わってきた。振り向いてみると黒い半球体が大地を侵食しながら大きくなっていくのが見えた。

「何だ、アレ」

距離自体かなり離れているものの、ここからでも分かる。人には決して制御できない程の魔力の塊だった。どす黒い魔力はあらゆるものを恨み妬み破壊し尽くさんと触手を揺らめかせていた。

「……闇そのものの、悪意の塊……」

俺自身化け物だから、絶対悪だからこそ分かる。アレは同じだと世界そのものに拒絶された存在だと。確かにアレに導かれたなら、平行世界に飛ばされたのも理解できなくはない。

アレが俺達を喚んだのであれば、俺が消える間際微かに聴こえた声はアレのモノだろう。

尋ねなければならぬ。

何故、俺に助けを求めたのか

「とりあえず行ってみるか　　マリアも行けるな」

結界が張られているようなのでおそらくこの世界にも魔法使いがいるらしい。あまり関わりたくは無いが、状況を考えると邂逅する可能性は高い。頷くマリアを確認して、影から愛用のコートを取り出して身につける。あくまで、無いよりはマシという奴だ。

一般人に気付かれないように認識障害の魔法を掛けてから地面に降り立ち、結界の境界付近に近付いて調べる。

「なるほどな。構成は良く分らんが、内部への侵入防止・人払い……あとは中から外への影響を無くす結界か。」

普通に侵入するのは難しい、か　　だったら、^{ゲート}転移を使うか」

人目に気付かれないように路地裏に隠れると俺達は自らの影の中に飛び込んだ。

新たな世界へ闇が重なる・前（後書き）

少し読みやすくするために行間を開けたりしてみましたけどどうでしょう？

・次回予告・

転移によって結界内に侵入した神風

そこで小さな魔法使い達に出会う。

「時空管理局だ？知らないな、俺はアイツに会いに来ただけだ。
死にたくなければそこを退け、ガキ共」

次回『新たな世界へ闇が重なる・後』

新たな世界へ闇が重なる・後（前書き）

前後編終了！！頑張った俺。

分かりにくいかもしれませんがご容赦を

新たな世界へ闇が重なる・後

「侵入には成功、か。確実に気付かれてるだろうし急がないとな」

結界内への転移に成功したものの、あくまで結界を作った人物にとつて俺達は異物でしかない。更に魔力自体は抑えていても、生体反応は残る。

こちら側に敵対の意志は無くとも、あちら側からすれば俺達は正体不明。確実に接触してくるはずだ。あくまで黒い球体に用事があるだけなので、わざわざこちらから接触する必要はない。

「と、思っていたんだがなあ……反応が海の方に移動しているな。これだつたら最初から海の方に向かった方が良かったな」

がつくり肩を落として大きく息を吐き出す。いらつきをアスファルトに積もった雪を蹴り飛ばし、何とか我慢する。

これから影を渡りながら気配を消して近付こうかと思っていたが、海上に移動しているなら隠れようがない。

「オリジナル超長距離瞬動『瞬影神雷』！！」

空気抵抗を減らすため操影術で作製した流線形の装甲に見を包んだ上で、魔力で強化した脚で大地を踏み込む。刹那身体に強烈な負荷が掛かる。空気抵抗自体は抑えているものの、それでも通常の瞬動とは比べものにならない。見えない手が内蔵を握り潰そうとする。それでも急がなくてはならない。

「間に合ええええ　　！！」

あの闇も本来存在してはならないもの。アレを悪だとすれば、おそらくいるであろう魔法使いは正義の味方だろう。このままでは消滅させられてしまう。別に消される事自体どうでもいい。

ただ、喚ばれた。俺はアレに喚ばれたのだ。俺が救ってみせる、なんて聖人みたいな台詞を吐きたい訳ではない。

会うことすら出来なければ 夢見が悪い。

アレの為なんて事は言わない。俺の、俺自身の自分勝手な理由だけだ。急激な加速に風景が後ろに流れていく。脳の視覚解析が追いつかず、色が薄れ、見えるものが全て線となって視界の端へと描かれる。

この距離なら後二分で到着か。

そう思っていた所で、上空に集まっている魔法使い達の姿に気が付いた。流石に声は聴こえない。ただ、緊迫した雰囲気と焦りの表情は分かる。多分、如何にアレを消滅させるかの話し合いって所かならば、まずは先約を済ませるためにも無視しておくか。

ただ、このままでは話を聞くどころか、突き抜けてしまう。

「 影よー!! 」

本来は抜きでブレーキを掛けるが、影でパラシュートを作りゆつくりと制動を掛けていく。これによって脚への負荷の軽減、更に瞬間では不可能な方向転換すら可能だ。

「 時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。そこの魔導師、止まれ 」

どうやら気付かれたらしい。進行方向を数人に阻まれ、停止を呼び掛けられた。

止まるしかない。ここで無視する事自体は可能だ。スピードは落ちつつあるが、高速なものには変わりがない。このまま突入すれば、確実に邪魔な連中は吹き飛ばせる。ただ、それをしてしまうと後々マズイ気がする。先程、黒づくめの男が言った『時空管理局』という言葉。あれは恐らく魔法使いに対する警察に近い存在だろう。ここで問題を起こして指名手配というのは勘弁して欲しいところだ。

一瞬の判断で制動を掛け、妨害者にぶつかる寸前で止まる。

「何か用か？俺はアレに用がある。多分俺が先客だからな、さっさとどいてくれると助かるんだが」

そう軽い口調で告げると問答無用で杖のようなものを目の前に突き付けられた。とはいえ杖と言って良いのか少し疑問だ。金属で造られているし、科学の臭いがする。何より飛行魔法の構成が元いた世界とはまるで異なる。平行世界というのもあながち間違いではないらしい。結論としては魔法を基礎に科学を発展させた世界らしい。魔法科学といったところか。

「いいから動くな！！こつちには余裕がないんだ」

一人思案していると、かなり焦った声で凄まれてしまった。正直、つねに死線をぐぐり抜けてきた俺からすればどうという事はないが、どうやら本当に切羽詰まった状況らしい。態度や目付きを観察すると余裕の欠片もない。何より俺というイレギュラーのせいでパニックに陥っている様にも見える。

「クロノ君！！」

そんな声と共にどんどん人が集まってくる。総勢十名。若干人ではない感じのする人物がいるが、細かい所までは分からない。犬耳の二人は狗族だろうとは思うが、他の三人は生命の感覚が薄い。魔

力生命体に近いだろうか。全員が敵意剥き出しの目で俺達を射貫く。

「何だよ、ガキばかりじゃないか。おいおい労働基準法とか倫理感とかはないのか？ そんなことより、その銀髪の嬢ちゃん」

やって来た魔法使いを見回したときに少し違和感があった少女に声を掛ける。

「どうもアレと似たような魔力を感じるが……」

精霊憑依に近いような気配がある。目線で海上に浮かぶ魔力の塊を示し、そう問い掛けると、ピクリと肩を震わせ縋るかの様に、手にした十字を象った杖を握り締める。

「細かいモノはどうでもいい。中にいる奴に訊くが『お前が俺を喚んだのか？』」

「リインフォースは何の事が分からないって言うてるよ」

「やっぱり俺の客はアレか……」

アレに似たモノがこの少女に憑いている。その事実ドロリと違和感を残すが今は頭の片隅に残すだけしておく。余計な思考は判断を鈍らせるだけだ。今はただ、アレに会いに行くだけに意識を傾けよう。

「さてと、とりあえずそこを退いてくれると助かる。ただ、邪魔をするなら容赦はしない。お前らを潰してでも通してもらおう」

殺気を込め、本気であることを示す。何より俺はイレギュラーだ。確かに問題事は避けるべきだが……

「『闇の書の闇』は我々の管轄だ。部外者は黙って」

「アレを何とかする方法があるなら、好きにしてくれ」

少年　クロノの言葉を遮って、敢えて好きにしろと言った。集まっていた時の様子を考えると、明らかにどうするか決め切れていない。これだけの大人数だ、議論にすらなっていない可能性すらある。だから敢えて焦らせる。そうすれば、恐らく上の人間からのアクションがあるはず。そう考えていた所で突然、目の前にモニターが現れる。

「少し、話をさせてもらっていいかしら？」

モニター越しに現れたのは翡翠色の髪の妙齡の女性。年齢で判断するのは失礼だが、先程の少年の上司だろう。内心ほくそ笑みながらも表情に出さないように話を続ける。

「ここのがキ共の上司か？」

「私は時空管理局提督のリンディ・ハラウンといいます。先程のクロノ執務官との会話から考えるとアレを、『闇の書の闇』をどうにか出来るのですか？」

「どうにか出来る、と言ったらどうする？」

不敵に笑んで問いを問いで返す。俺の意図を理解したのか思案するかのように、考え込む。

「何が　望みですか？」

「俺と連れに関する一切の詮索を辞めること。更に、どのような結果であろうと納得すること。以上二つを認めなければ、俺達は一切の協力を拒否し、勝手に行動させてもらう」

「ふざけるな！！」俺の言葉に少年が詰め寄ってくるが、鳩尾に掌底を叩き込み距離を開ける。完全な不意打ちに少年は悶絶。胸を抑え唸り声を上げている。

「はつきりと言っておく。ここにいる連中を俺は瞬殺出来るぞ。別に俺はそうしても構わないしな」

低い声でそう忠告した上で、魔力を解き放つ。

「魔力反応 測定不能！？人間が出せる魔力量ではありません。SSS級ロストギアクラスです」

モニター越しから慌ただしい声が聴こえてきた。

「さてどうする提督殿。条件を飲むか、ここにいる全員を骸と化すか。さあ、選べ。正直、封印状態でここまで魔力を解放するのも面倒なんだ」

ゆっくりと魔力を抑え、本気の殺気を持って包囲している連中へと叩き付ける。

「ヒッ ！？」

少女達は悲鳴を上げ、その場にへたり込んでしまった。唯一先程の少年と剣を握った少女数人が何とか耐えられている状況だ。とは言っても顔は青ざめ呼吸は浅い。

「 分かりました。そのかわり解決した後に、結果について話を聞かせてもらってもよろしいかしら」

「まあ、それぐらいは妥協しよう」

交渉としては十分及第点だ。殺気を止め、宙をそのまま真つすぐ移動しようとしたのだが、少女が二人立ち塞がった。

「待ってください！！は、話を聞かせてください」

怯えながらも気丈に杖を構える茶髪の少女。

「これ以上行かせる訳にはいかない！！」

膝を震わせながらも魔力でできた巨大な刃を突き付けてくる金髪の少女。

「どういうつもりだ？俺はお前らの上司に許可を取った上で行動している。及び腰ながらも立ち塞がる気概は認めないでもないが、これ以上邪魔をするなら死んでも文句言わないよな」

影の倉庫から一降りの斬馬刀を取り出し片腕のみで軽く振り上げ肩に担ぐ。

「十秒待ってやる。道を開けなければ 殺す」

ゆっくりとカウントダウンしながらも一步一步、少女達へと近付いていく。

「なのはちゃんにフェイトちゃん！！行かせなさい、これは命令よ」

背中越しに提督の言葉が聴こえてくる。

「……五……四……それで良い」

悩んだようだが身体を避けて道を開けた。

「名前を聞いておこう」

通り過ぎる寸前、身体が並んだ際に問い掛ける。

「フエイト・テストロッサ」

「高町なのはです。あなたは？」

「もう名乗る名は……ない。そうだな……終焉、^{デッドエンド}とも呼んでくれ。もしくは《終焉王》とでもな」

そう囁いて、瞬動で球体へと近付く。

「でかいな　ここからなら俺でも分かる。球体を形成しているのは殻だ」　内側は苦しみ・悲しみ・痛み　そして絶望。ありとあらゆる負が蠢く混沌。

そつと表面に触れると波紋が広がり、中心へと誘う道が出来る。その奥から断末魔に似た叫びが聴こえてくる。

「今行くぞ。少し待ってろ」

入口をくぐり、奥へと進む。一歩踏み出す度に内包する負の感情が俺の脳に直接、映像を見せてくる。

それは正に死そのもの

恐らく、この光景こそが、闇の根源。闇の書が暴走を起こす度に引き起こされた破滅。そして、消滅。消滅と転生を繰り返し、自らがそれを行う原因と呪い、苦しんだ。

《 誰か助けて 》

そんな叫びが聴こえた。

この地獄を見れば分かる。

俺と同じだ。無限の輪廻から解き放たれたいと。自らの死を望む。

《 誰か、誰かこの地獄を終わらせてください 》

「 分かった。俺が救ってやる。俺が、お前の地獄を終わらせてやる 」

この苦しみを俺は知っている。闇は、悪は本来救われない。ただ、同じ痛みを知る悪が救おう。

「 何だ……？ 光が見える 」

ふと気付くと通路の奥に小さな光が見えた。あまりにも小さなその光は自らを示すかのように弱く微かに、心臓の鼓動のように明滅を繰り返す。

そのまま進み、光を放つ球体が手に届く辺りで足を止める。

「 お前が俺を喚んだのか？ 」

《 私を助けてくれませんか 》

どこからともかく聴こえてくる声。ただ、声の主がこの光だと理

解できた。悪である俺が同じ悪として生まれたモノを救う。その事に苦笑を浮かべ頭を搔く。

「勝手に異世界に連れて来といて『助けてくれませんか』か
本当ならキレてやるうかと思っていたがまあいい、どうしたらいい。俺の力で終わらせてやることも出来るが？他の方法がお望みか？」

《私に名前を下さい。『闇の書の闇』などではなく、新たな名を。
新たな命を！！》

「 分かった、名をやる。
命の護り手、魂担う方舟『ソウルノア』！！」

《『ソウルノア』》

「ああ、お前の新しい名だ。破壊のためではなく、護るためにその力を使い、『ソウルノア』」

《 ありがとう、ございます、我が主》

強烈な光が目を眩ませる。そしてその輝きが収まった時、そこにいたのは人の形をした何か。俺に向かって跪き、両手に持った二降りの小太刀を捧げ上げる。漆黒の髪が垂れ、表情は伺えない。ただ自らの思いを託すかのように、グッと持ち上げる。

「我が身、我が力は全て我が主が為に
受け取って貰えませんか」

表情は見えなくとも覚悟を持って俺に向き合っている。

ならば 俺の答えは決まっている。

斬馬刀を影に戻し、捧げられた小太刀を受け取る。

「受け取るう、お前の力 お前の魂を！！」

刹那、『ソウルノア』の所有する膨大な情報・知識が頭の中を駆け巡る。

「命担う方舟、断罪の刃『ソウルノア』セツトアップ ！！」

魔力が体中を覆い、漆黒の甲冑へと姿を変える。黒のロングコート、更に肩まで覆う両腕の籠手。どうやらイメージ通りの騎士甲冑が出来ているようだ。

「なるほど これがこの世界の魔法か……何というか独特の臭いがあるな」

「近代主流のミッド式とは違いますので、特殊なモノが多いのは事実です」

今まで使ってきた魔法とは異なるという意味で話したのだが勘違いされたようだ。

「悪いが 顔がよく見えない。立ち上がってくれないか？」

俺の言葉に音もなく立ち上がる。漆黒のウェーブの掛かった長い髪、褐色の肌。純白の拘束着のようなワンピースのせいで身体ラインがはっきり分かる。何故か首元には十字架をあしらった首輪が嵌められ、そこから鎖が胸元に垂れていた。

そんな『ソウルノア』の頬に一筋の涙。右手で頬を撫で、涙を拭く。

「何故、泣いている」

そんな俺の言葉に目を細め、首を何度も振った。

「嬉しいのです。主に出会い、名を頂き、新たな命を授かり…本当に幸せです」

そう微笑む彼女の頭を撫でながら周りを見渡す。核である彼女を失い、制御のない純粹な魔力が辺りを喰い尽くさんと無秩序に暴れ回っていた。

「さてと 面倒だが、これをどうにかしないと」

「既にこれらは単なる魔力の塊です。腕慣らしとして破壊してみてくださいはどうですか？」

「まあ、そういうのは性に合ってるしな。『ソウルノア』第三形態」

両腕に握った小太刀を重ね合わせると融合して野太刀へと姿を変える。

「『ユニゾンイン！』」

『ソウルノア』が俺の中へと取り込まれ体中を魔力が満たしていく。融合を行った為か漆黒のコートが金色に輝き、籠手の外観も変化する。

「マリア、悪いがお前も俺の中に戻れ」

俺がそう告げると少し悲しそうな顔をしたが、そのまま輪郭がぼやけ消えてしまった。それを確認して野太刀を両手で握り、刀身を肩に掛け担ぐように構える。

「ロードカートリッジ!!」

「カートリッジロード!!」

装填音と共に刀身に魔力が充填され、柄の先端から薬莖のような物が三発分排出される。刀身は魔力によって更に長く、大きくなっていく。

「斬り臥せる断罪『神威一閃』!!」

担いでいた肩を支点に、急激な加速度を持って刀身を振り下ろす。魔力を纏った刀身は空気を切り裂き、魔力のドームを一刀両断する。衝撃に耐え切れず、殻に亀裂が走り音を立て崩れていく。それが終わったとき、辺りは夜の静寂と心地好い闇が包み込んでいた。

頬に当たる柔らかな感触に見上げれば

「雪か……お前の新たな誕生を天も祝福してくれているらしい」

《ありがとうございます、我が主》

直接、脳に響く声色はどこか弾んで感じる。

「そういえば、俺の名を伝えてなかったな。俺の名は神風遊馬だ」

新たな世界へ闇が重なる・後（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。実はこの小説を書くまでは、リリなの知識は二次創作のみ、とかなり偏った？知識しかありませんでした。なんで今は頑張ってアニメを見る日々です…

…

・次回予告・

報告の為に次元艦アースラへと移動した神凧達の前に現れた提督。

『ソウルノア』の破壊を求める管理局に対して怒りを露わにする神凧

その結末は如何に

次回『恨みの対象』

呪いの対象（前書き）

頑張つて投稿

言い訳は後！！

呪いの対象

「さて、ある程度の事は分かっているだろう。ここから先は質疑応答の時間だ。何を知りたい、リンディ・ハラウン提督」

次元艦アースラの一室。不釣り合いな野点の莫蔭の上に胡座をかいて対面に座るリンディ・ハラウンとクロノに向けて問い掛けた。俺の隣には何故か融合を解除され人型となった『リインフォース』と『夜天の書』の主、八神はやての姿があつた。

「それじゃあ二三確認させてもらいます」

何故、こんな状況になっているのか。それを説明するには約一時間前に遡る必要がある。

ノアと共に闇の中から脱出した後、雪の降る光景をノアに見せるためにのんびり佇んでいたところに、先程の少女達がやって来た。

「少し、話聞かせてもらうてもよろしいですか？」

おずおずと前に来て真つすぐ俺を強い視線で見つめてくる。『ソウルノア』の主となりこの世界の仕組み、魔法の知識を手に入れた今なら分かる。この少女が、今目の前にいる優しげな目をした幼い少女が『夜天の書』の主だということを。そして先程の違和感の正体が『夜天の書』の管制人格と融合の結果だと。

（どうする、お前も出て来て話をするか？）

《そうですね。私も管制人格と元主には挨拶しておきたいです》

念話で尋ねると、幾許かの間を開け、少し哀しみの浮かぶ声色で返された。それが何故かを尋ねたかったが、どうしても出来なかった。

「ユニゾンアウト」

融合を解除しノアの姿を見せると、周りにいた面々が目を見開き、愕然とした表情で『夜天の書』の主を見つめる。

「闇の、書さん……？」

高町なのはが動揺に声を震わせた。そんなのはに一瞥し、向き直ると『夜天の書』の主と融合している管制人格へと声を掛ける。

「管制人格よ、少し話がしたい。融合を解除してもらえるか」

「リイン、フォース？いや違うな。アンタ何者や」

恐らく管制人格の名であろうモノを呟き、疑いの眼差しでノアを射抜く。そんな彼女の態度にノアは目に悲しみを堪える。

「貴方には分からないのですね……いや、貴方に恨み言を言っても仕方の無いこと。多分、管制人格には私が何者か分かっているはずですよ」

そんなノアの哀しみに応えるかのように管制人格が姿を現す。銀髪をたなびかせ、透き通った白い絹のような肌。更に、黒のワンピースに血のような紅い眼。対峙する二人はまるでカードの裏表のよう似ていた。白と黒。聖と魔、そして善と悪。決して重なることない二つの背反。

「初めまして、と言うべきか。管制人格『リインフォース』よ」

「まさか、防衛プログラムなのか？しかし防衛プログラム自体に人格など」

「確かに本来であれば、こうして話をするどころか人格すら存在しません。ところが幾度となく繰り返された転生の結果、改変によって生まれた莫大なバグが複雑に絡み合い、私という人格を生み出しました。決して表に出されることなく破壊と消滅を繰り返す様をずっと見つめてきました」

ドロリと空気が淀む。ノアの感情によって溢れ出た狂気がここにいる全員の身体に纏わり付き呪いを囁く。

「貴方が『リインフォース』という名を与えられている所も見えていましたよ？

幸せそうでしたね

人格を持ちながら救われる事なく地獄を見せられ、更に貴方を救ってくれた主にすらバグとして切り離され、見捨てられた。

この悲哀がッ！！この絶望がッ！！地獄がッ！！貴方に理解できますか！？」

涙で頬を濡らしながら彼女達を断罪するノアの姿に誰も掛ける言葉を見つけれない。そんなノアの肩を抱き寄せ、頭をゆっくり撫でる。

「もう少し早く救えれば良かったな。スマン、『ソウルノア』」

「そんなことはありませんッ！！私は主に救われました。貴方が謝る必要など、ありません」

胸に顔を埋めるノアを落ち着かせながら、彼女達へと目を向ける。『夜天の書』の主は後悔に涙を浮かべ拳をきつく握りしめ、リイン

フォースは俯き肩を震わせていた。

「別にお前らに謝ってほしい訳ではない。ノアの為に涙を流してくれるお前らにはな。ただ、コイツ自身、自分の中の苦しみをお前らに理解して欲しいだけだ。俺が名と新たな命を与えたことで防衛プログラムとしての機能は完全に失われている。今のコイツは『ソウルノア』という生まれたばかりのデバイスでしかない。それを理解してほしい」

しばらく撫でていると胸元から可愛らしい寝息が聞こえてきた。どうやら泣き疲れて眠ってしまったらしい。安らかな寝顔に笑みを浮かべる。

「リンディ・ハラOWN提督どうせ状況は把握しているんだろう。悪いがノアを休ませたい。どこかベッドを貸してもらえないか？」

起こさないように慎重に抱き上げる。すると、再びモニターが現れ映像が映る。

「分かりました。艦内の仮眠室を準備させましょう。クロノ、彼等をアースラまで案内してちょうだい」

「分かりました」

足元に全員を覆うように円形の魔法陣が現れ、俺達を転移させる。

光景が一気に変化し、目の前には長い廊下が奥へと続いていた。

「とりあえずフェイト達は休憩室で待機していてくれ。君達は仮眠

室に案内するついて来てくれ」

そう言っただけ歩きだすクロノの後を追いかける。廊下をある程度進み、ある扉の前で立ち止まった。自動で扉が開き、薄暗い簡素な作りの部屋の中に備え付けの机とベッドが置かれていた。ベッドにノアを横たわせ、頭を撫でる。

「ゆっくり休んでくれ。これからはずっと一緒だ」

聞こえるはずの無い言葉。けれど届いてほしい想い。ぐっすりと眠る様子に満足し、部屋を出る。

「何で『夜天の書』の主と管制人格までここにいる？」

監視の為にクロノ少年がいるのは分かるが、彼女達がこの場にいる意味が分からない。

「あたしらも艦長さんに呼ばれとるんよ。まあ、あたしの為とはいえリンカーコアの蒐集をしたことには変わらんからな。夜天の主として罪を償うつもりや」

吹っ切れたように明るくそう言う少女。本人がそう言うなら、俺から告げる事の出来る言葉は、少ない。

「そうか」

ただ、小さく呟き無言で進む。そして状況は今に至る訳だ。

「結局、貴方は何者ですか？ 条件で貴方の正体への詮索はする

つもりはありませんが、私は上に立つ人間として真実を知らなければなりません。内容をそのまま上に伝えるつもりはありません。この会談、更に戦闘の記録は私の権限で消去します」

会談の内容を消す。これは確実に問題行動だろう。もしバレれば罪に問われるレベルの物だ。二も関わらず、後悔もなく覚悟に満ちた眼でコチラを見てくる。

「まあ、そこまでの覚悟があるなら良い。俺はこの世界の言葉で言えば『次元漂流者』というのが近いな。異世界の魔法使いだ。お前達の使う魔法とは系統も違うがな」

少し言葉を選びつつ、話を続ける。

「俺がこの世界に来たのは『ソウルノア』に喚ばれたからだ。
これ以上は教えられないな」

俺の言葉を吟味した上で、次の問いに進む。

「先程はやてさんとの会話で『闇の書のバグ』は消えたと言っていましたが、それは本当ですか？」

「事実だ。『夜天の書』から切り離されたアレは純粹な情報の塊だ。俺を主として認めたことで防衛プログラムはバグを含めて上書きされている。多分、その辺りは俺よりも管制人格である『リインフォース』の方が分かると思うぞ」

視線を隣に向けるとリインフォースは頷き、引き継ぐ。

「私も会った際に調べましたが、得に問題ありませんでした。完全

にプログラムの情報が根幹から書き換えられ防衛プログラムそのものが消滅しています。暴走の可能性も、ないでしょう」

「それでもかなり危険性の高い存在であることには変わりが無い。何よりコイツは犯罪者だ！！」

声を荒げ、俺を睨みつけてくるクロノ。それを真正面から受け止め尋ねる。

「俺が犯罪者か。罪状は？」

「惚けるのもいい加減にしろ！！僕に対する公務執行妨害、『闇の書』の闇の消滅に対する妨害、更に質量兵器の所持だ」

「お前は馬鹿か。とりあえず二つ目はお前の上司に対して行動の許可を取っているから問題無いだろ。更に残りの二つだが、地球は管理外世界のはずだ。管理局とは関係ない場所で管理局員という肩書は意味が無い。しかも、質量兵器という概念はそちら側の物だろう。もしも俺の罪を問いたいなら日本の法律で裁いてくれ。まあ、その為には日本に魔法をバラす必要があるがな」

クロノの言葉を鼻で笑って反論するが、言葉は返って来ない。正論なのだからそれも当然だ。ただし銃刀法違反は素直に引っ掛かるので黙っておく。

「　　どういうことや？」

どうやら良く理解できないらしく、少女は首を捻る。

「例えば日本の警察官が旅行で外国に行ったとするだろ」

頷く少女。

「そこで酔っ払いに殴られたとする。で、殴られた日本人が『私は日本では警察官だ。だから公務執行妨害で訴える』と騒いだとしても、外国である以上この日本人は単なる一般人だろう」

「そっか、外国の法律で暴行の罪に問うことは可能でも、日本の法律では裁けへんって事か」

「そっいう事だ。頭いいな、嬢ちゃん」

「嬢ちゃんってのは止めてくれへん？わたしには八神はやてっちゅう、歴とした名前があるんや」

「了解だ、はやての嬢ちゃん」

軽い口調で応え頭をグリグリ撫で回すと、ボサボサになった髪を抑え涙目で頬を膨らませて睨んでくる。その様子が更に子供らしいというのは薮蛇だろう。むしろクロノとはやて以外の面々は微笑ましい光景を目を緩め眺めていた。

「とりあえず貴方の事は分かりました。次元漂流者であれば本来、管理局で保護をするのですが、貴方は断るでしょう？」

「問題無いな。戸籍とかは何かしたいところだが、まあ金銭面は余裕があるしな」

唯一、困るとしたら住むところぐらいだ。最悪、囑託扱いで管理

局に入れば寢床の心配は無くなる。むしろ野宿でテント暮らしでいるものんびり出来て良いかもしれない。そんなことを考えていると再びはやてが話掛けてきた。

「わたしの家に来ませんか？」

どうやらこの少女は馬鹿が付くほどのお人よらしい。呆れてしまつて何も言えずに静寂が空しい。周りも同じようなことを感じていたのか呆れ果てていた。とは言え、申し出自体は有り難い。

「まあ、もしも守護騎士達全員が許可出してくれば考えるよ」

「そんなことより、そろそろはやてさんの方の話をさせて貰つてもいいかしら」

このままグダグダした空気になるのを防ぐため、リンディが本題へと促す。

「流石に先程とは違って無罪になる状況ではない事は分かっているわね」

少し声を抑え、低い声で忠告する。先程までの和やかな空気は一転して緊迫感漂う。

「過去の『闇の書』に関する被害については罪を償うべき当事者が既にいないためどうしようもない」

少し複雑な表情のクロノ。もしかしたらクロノも、そしてリンディも被害者の一人なのかもしれない。それを知る術は俺にはない。暴走した『闇の書』の末路は『ソウルノア』の記憶として知って

いる。暴走によって破壊の限りを尽くし主の死によって次の主へと転生するか、もしくはアルカンシエルという空間歪曲による破壊。どちらにしろ主そのものは転生の度に死に絶える。『夜天の書』を『闇の書』と改悪させたバグも消え、結果として残るのは八神はやてが主としての罪のみ。

「無人世界での魔力生命体に対するリンカーコアの蒐集。及び魔導師襲撃。更に未遂ではあるが『闇の書』完成を目指した事。この三点に関しては消すことが出来ない罪だ」

突き放すような、そんなクロノの物言いにはやては静かに頷いた。

「待ってください！！責任は魔導書の管制人格である私に　主はやて？」

身を乗り出し苦痛に顔を強張らせ叫ぶリインフォースをはやては手で抑え遮った。

どんな理由であれ罪は罪だと。守護騎士達の罪を主である自分も償うと。

「とは言っても、はやての状況を考えると仕方がないと言える。更に罪を償う意志もあるし、何より若い。そう言った点を鑑みると保護観察処分、更に管理局への従事による罪の償いという所が妥当だと思えますが艦長はどう思いますか？」

悪戯が成功した子供のようにニヤリと笑い、隣のリンディへと意見を求める。

「そうね。裁判官では無いから詳しいことは言えないけれど、思い罪にはならないはずよ。私たちも、弁護にまわるつもりだし」

応えるリンディも朗らかに微笑む。それにはやては目尻に涙を溜め、ただただ感謝し続けた。

しばらくしてはやてとリインフォースは部屋を出て行った。はやてを乗せた車椅子を押すリインフォースの陰の残る表情に違和感を覚えた。

「それにしても坊主もなかなか良い奴じゃないか。俺に対する対応とは大違いだな」

「フンッお前は嫌いだ」

「俺はそこまでのお前のことは嫌いでは無いんだがな、坊主」

「気持ち悪い事を言うな！それよりさっきから坊主なんて呼ぶな！」

クロノも子供扱いが嫌いらしい。顔を真っ赤にして憤慨する姿はこれ以上は思わないでおこう。藪蛇だし二番煎じもいいところだ。ただ、無意識に余計な爆弾は投下してしまった。

「おいおいこれでも俺は五十手前だ。俺からすればここにいる連中は大体赤ん坊だろう」

言い切った所で自分が墓穴を掘ったと気付く。

「どういうことかしら？」

笑顔だが目が笑っていない。有無を言わず答えさせる威圧感がそこにはあった。

「細かい事は省くが、俺は竜族の末裔だ。寿命が一般人の数倍ある分、体の成長は遅い。ただそれだけだ」

半分嘘を交えてごまかす。元々、竜族なのは本当だが今となっては不老不死の化け物でしかない。身を墜とした事に後悔はないが。

「別に若返りの妙薬を持っている訳では無いのね!？」

鬼気迫るとは正に今の状況だろうか。やはり女性の美への想いとというのは度し難い。

「そんな都合の良いものは持ち合わせていないな」

即座に否定して逃げるように部屋を出た。

部屋を出てノアのいる仮眠室へと戻った所、何故かノアだけでなくリインフォース、更には守護騎士達が集まっていた。皆一様に表情は暗い。

「おかえりなさい、主遊馬」

予想外の状況に思考の止まった俺にノアの声が掛かる。ハッと我に返った俺は内心相変わらずハプニングに弱いと落ち込みながらも部屋に入る。

「何か あったのか？」

「貴方と『ソウルノア』の二人の手で私を消滅させてほしい」

嫌な予感というものは総じて当たりやすいものだ。

時は

あまりに残酷で

気付いた時には既に遅く

最悪の結末を突き付ける

呪いの対象（後書き）

まあ、予告とは随分違った感じになりました。

キャラが独り歩きするのを止める事が出来ませんでした。

話は変わってついさっきアクセス数を見てみました。

6000アクセス突破！！

思わず吹き出しました……

多いのかどうかは分かりませんが、流石リリなの知名度！！というやつです。

見ていただいた皆様に感謝を。

・次回予告・

「私は世界で一番幸福な魔導書です」

そう言ってリインフォースは、雪の降る空へと消えた。

「 辛いな」

「主遊馬？」

「いつも思う。もっと俺に力があれば、別の結末もあったんじゃないか、とな……」

次回『想い／＼幸せの欠片』

想いゝ幸せの欠片（前書き）

かなり難産……その上かなりのグダグダっぷりを発揮しております

想い／幸せの欠片

『自分を殺せ』

目の前の少女、リインフォースはそう言った。重苦しい雰囲気の中。けれど、何故か彼女の表情は暗くない。明るい訳ではない。満足げで晴れやかだ。ただ、対照的に守護騎士達、そしてノアの表情は暗い。

「本当ならふざけるな、と言いたい所だが……とりあえず理由は何だ？」

防衛プログラムを切り離した結果として今の『夜天の書』にはバグはない。けれどリインフォースは消滅を望んでいる。その理由が分からない。

「今のままでは失われた防衛プログラムを再生してしまいます。それもバグの残った形で

そうなってしまうえば再び暴走し、主はやてを危険に晒すことになります。それを防ぐにはバグのない今の状態で消滅させるしかありません。転生もバグによるものなので、今なら再生しません」

「今の状態なら修復も可能ではないのか？」

「私の中には既に元の書のプログラムは失われています。元の形が分からない以上、修正は不可能です」

横目でリインフォースとノアは見つめ合い、頷く。恐らく、リインフォース達がここにいた理由は元が防衛プログラムである『ソウ

ルノア』の中に本来の防衛プログラムの記憶があるかの確認のためだったのだろう。様子を見る限り、それは残っていなかったようだ。『ソウルノア』の人格はバグによる副産物だ。そういう意味では残っているはずがない。

「本当は高町なのはとフェイト・テストロッサにお願いしようと考えていたのですが……」

そう言ってリインフォースは俯く。何を考えているのか、漠然とした物だが理解できなくはない。彼女達は幼い。いくらリインフォースはプログラムとはいえ、彼女達の手で消滅させるのは酷だ。確実に彼女達の大切な何かに傷を残してしまう。

「最後に訊くが、『夜天の書』を消滅させると守護騎士達も消えるのではないか？」

俺の中での気持ちは決まった。リインフォースの覚悟を受け取るう。

「守護騎士達は既に『夜天の書』から切り離しました。元々、守護騎士のプログラムは改変されていませんから暴走もありません」

「分かった……ならばお前の頼みを必ず叶えると誓おう。それで良いか？」

結局、俺の力ではリインフォースを助ける事は出来ない。俺の知識はあまりにも戦闘に特化しすぎている。エヴァのような博識な魔法使いならともかく俺の本質はあくまで戦闘者。そして破壊者。誰かを助けたいが為に身につけた力であっても救えない。その事実が

無力感として俺の身体に重くのしかかる。俺自身に原因や責任がある訳ではない事は理解している。ただ、それでも後悔と自責の念が心臓を握り潰す。

だからこそ受け入れよう。俺は弱い。諦めでも開き直りでもなく、純粹に純然たる事実として　この身に罪を刻もう。少女達の変わりに傷を負おう。

それが俺に出来る唯一の事だから。

「よろしいのですか？主遊馬」

ノアが神妙な面持ちで尋ねてきた。今この場にいるのは俺とノアだけだ。リインフォースを筆頭にした面々は俺が了承した後、二三確認した上で出て行った。

儀式は明朝六時。主ではやてには告げずリインフォースの独断という形で行われることになった。

今は彼女達がクロノ達に状況を説明している最中だろう。

「何がだ？ノア」

言葉少なく、俺は尋ね返す。正直なところ、ノアが尋ねている内容は分かっている。それに対する返答も既に心の中にある。

「リインフォースの頼みをきいて良かったのですか？」

ノアも理解しているにも関わらず、そんなことを言った。

「仕方ない、と言ってしまつのも馬鹿みたいな話だが……これしか方法が無いのだろう？」

目の前の少女は酷く脆い。氷細工の様に触れれば溶けて消えてしまいそうだ。あまりにも存在が薄く、臍げだった。悔やんでいるのだろうか、悲しんでいるのだろうか。その表情から読み取れる感情は膨大過ぎて、俺には把握しきれない。ただ、俺の言葉に頷くだけだ。今にも泣き出してしまうようなノア。実際の世界に現出してから約二時間。そう考えるとあまりに幼く感じてしまふ。感情と外界からの刺激の差異に上手く順応しきれていないのだろう。

「だから俺は罪を受け入れるさ。彼女達には酷過ぎる。恨まれても良い、敵になつても良い。彼女達の先はあまりにも明るいからな。こんな所で余計な疵を負う必要はない……」

『彼女達の為に俺は悪役になろう』

小さな呟きは彼女に届いただろうか……

ここにいる総ての魔法使い達は若い。まだまだ先がある。どんなモノにもなれる無限の可能性を秘めている。もちろん、目の前にいる『ソウルノア』もだ。

俺のようにほの暗い闇を歩む必要はない。むしろ俺が今から明るい道を歩むのは虫が良すぎる話だ。俺の背後に続くのは怨嗟の断末魔。俺の背中には死してなお遣る呪詛が連なっているから。

これは俺が背負わなくてはならない業だ。それが一つくらい増えたところで何ということはない。

不意に暖かいものが頬に触れた。どうも思考の闇に吞まれていたらしく、気付かなかった。ノアが俺の頬に手を当てそつと微笑む。その表情は柔らかく、暖かな安らぎを与えてくれる。何年も前に置

き去りにした想いを、既に色褪せボロボロに壊れた欠片をそつと手にとって俺に差し出す。

「主が今までどれ程の痛み、傷を受けてきたのか私は知りません。

けれど、私は主に救われた一人です。私のこの身、この魂も主のおかげで今があります。

傷を負うなどとは言いません。ただこれから先、主の傷を私にも分けてください。

主は優し過ぎるから……

他人が苦しむぐらいなら自ら傷を受け入れる人だから……

主の幸せは私の幸せ、主の傷も私の傷です。力になれないかもしれませんが、常に共に在ることは出来ます。

だから苦しまないでください」

彼女の瞳から零れた雫に、脳裏にある風景が溢れ出す。

遠い遠い記憶。

救いを棄てた俺が逃げるように閉じ込めた幸せ。

一度きりの『幸福』。

彼女もあの時、

こんな風に笑って、

泣いていたような気がする。

唐突に、背中に重みを感じた。気配でその正体がマリアだと分かった。彼女もまた、あの時と同じように俺を抱きしめてくれた。既に人ではなく、感情もほとんど磨耗し削れているにも関わらず。

「
ありがとう」

今は彼女達の優しさに包まれていたくて、静かに目を閉じた。

翌朝。粉雪舞う坂道を俺とノアは並んで歩く。坂道に残る足跡の量からすると既にほとんどの連中が集まっているようだ。

空を見上げ、軽く息を吐いた。白い息はゆつくりと宙に消えていく。

普段通りとは言えないが、仕方が無い。やはり知り合いを殺すのは割り切れるモノではないのかもしれない。ノアの足取りも少し重い。

それでも決して歩みは止めない。リインフォースの覚悟を無駄にしないように、そして俺達の想いを裏切らないために。

しばらく歩いていると目の前が一気に開けた。どうやら到着したようだ。街　海鳴市というらしいが、それを一望できる高台。ベンチなども設備されているところを考えると公園のような施設なのだろう。

「ああ、来てくれたのか……」

幸せそうに両手を掲げ雪の感触を楽しんでいたリインフォースは俺達の到着に気付くと、嬉しそうに目を細め天を見上げた。その奥

には心配そうに顔を歪める守護騎士たち、そしてどこか納得がいていない表情の高町なのはとフェイト・テストロッサがそれぞれ集まってコチラを見つめていた。

「約束、したからな……」

ぶっきらぼうに呟いて、リインフォースと向かい合う。お互いに無言。言いたいことは沢山ある。けれど、あまりにも無粋だろう。沈黙をもって語り合う。

「リインフォースさん……」

不意に後ろにいた高町なのはが声を掛けてきた。その表情はやはり暗い。瞳に悲しみを湛え、真つすぐリインフォースに対峙する。対してリインフォースは嬉しそうに口許を緩める。

「……その名で、呼んでくれるのだな」

『闇の書』としてではなく『夜天の書』の管制人格『リインフォース』として逝ける。それが何よりの幸せなのだろう。

「はやてちゃんと、お別れしなくて良いんですか？」

「主はやてを悲しませたくないんだ」

高町なのはの問いに、リインフォースはそう答えた。どこまでも穏やかな顔に悲しさなど微塵も無かった。

「でもそんなの……何だか、悲しいよ　　!!」

「お前達もいずれ分かる。海より深く愛し、その幸福を護りたいと思える者と出会えればな」

駄々をこねる子供を諭すように語りかける。その言葉の半分さえ理解できているかは分からない。けれど、リインフォースの満足げに笑う顔を見て高町なのは俯き黙り込む。諦めきれない感情とは別に、心の奥底 本能というべきモノがこれ以上の会話を閉ざした。

「そろそろ始めよう」

夜天の魔導書の、終焉だ……」

リインフォースの手にしていた『夜天の書』が魔力によって導かれ宙に漂う。足元に純白の魔法陣が浮かび上がる。古代ベルカ式独特の三角形の文様。その中心にリインフォースが佇み、瞳を閉じた。俺とノアはリインフォースを挟む形で相対し、魔法陣の辺に重ね合わせる形で新たな魔法陣を描く。

「お前達にも世話になったな」

暖かな笑み。

「 気にするな」

リインフォースの言葉に軽く返し、空を仰ぐ。深々と降り積もる雪。幸せをもって逝けるリインフォースを祝福してくれているような、そんな気がする。辺りを包む静寂はどこか儚い。何かの終わりというのは、いつもこんな風にどこかやるせない。

「リインフォース!!」

静寂を切り裂く叫び

魔法陣に集中していて気付かなかったが、車椅子を必死に漕いで坂道を夜天の主、八神はやてが登ってきた。

駆け寄ろうとする守護騎士達をリインフォースは制止した。

「動くな!! 儀式が止まる」

心配そうな表情の守護騎士をリインフォースは鋭い視線で射抜く。

「破壊なんかせんでええ!! あたしがちゃんと抑える。大丈夫や!
こんなん、せんでええ!!」

今にも泣き出しそうな表情。沈痛な叫びが辺りに響き渡る。

「主はやて 良いですよ」

「良い事ない。いいことなんて、何もあらへん!!」

周りの表情が曇る。分かっていたことだ。決して認めることの出来ない結末。それを今日の前に突き付けられている。こんな風に状況を平静に眺めていられる俺はどこか壊れていると再確認。それが悲しい訳ではない。今はもう救われた身だ。これが最上であるのなら、俺の身をもって成し遂げよう。

「随分と永い刻を生きてきましたが」

懐かしむように瞳を閉じ、内に想いを走らせる。

「最後の最後で、私は貴方に綺麗な名前と心を頂きました。騎士達は貴方の側にいます。何も心配はありません」

彼女は言っていた。主の幸せが彼女の幸せだと。そこに自分の姿がなくとも

だから彼女は笑って逝けるのだろう。

「心配とか そんなッ」

心配ない、そう言って笑うリインフォースの表情にはやては思わず言い淀む。

「ですから、私は笑って逝けるのです」

自身の終焉。それが刻一刻と近付きながら、それでも彼女は笑みを失わない。

彼女の笑顔を忘れないように目を閉じ、意識を内へと向ける。

誰かを救う行為は砂を持ち上げる行為に似ている。どれだけ大きく手を広げても、指の隙間から零れ落ちてしまう。

救いたい誰かの為に、別の何かを失う。胸に痛みが走る。多分周りもそうだろう。

先のある少女達よ、その痛みを決して忘れてはいけない。それが、幸せの代償だから。その痛みを心に刻んでこれから生きていけ。

《 最期に、一つだけお願いがあります 》

突然、脳に直接声が響く。秘匿回線によってただ俺のみに届く遺言。

《……何だ？ 》

《主はやてを護って頂けませんか？主が一人前になるまで、そばで見護っていて欲しいのです 》

《守護騎士達がいるだろう 》

《こう言っではなんですが、彼女達は融通が効きません。どうしても臨機応変な対応が出来ません。だから 貴方をお願いしたいのです 》

《 分かった。 》

別れは済んだのか？ 》

《ええ。主はやても理解してくれるでしょう 》

理解か……

なかなか都合の良い言葉だ。こちら側に非が無いように見せかけるには最適な台詞だ。去る側と残される側。その二つは決して重ならない。

《 お前は必ず笑って逝け。残される側にこそ、安心を与えてやれ 》

《 ？ 》

分からなくても良い。彼女達を残しておけば大丈夫という意味を示してほしい。彼女達に心配はないからと、心の底から笑っていてほしい。ただ、それだけの話だ。

儀式もようやく佳境に入った。後は、リインフォースが魔法陣に魔力を通すだけ。それですべてが終わる。

「主はやて

守護騎士たち

小さな勇者たち

そして、異世界の魔法使いよ。

『ありがとう』

そして、『さようなら』……」

天を見上げたリインフォースの姿が光の筋となって天へと昇っていく。その光が消え、リインフォースが逝った事を証明するかのように彼女の造った白い魔法陣が力を失う。

その瞬間、『夜天の書』は世界から姿を消した

零れそうな涙を我慢しようとリインフォースの逝った先を見詰めるはやて。

すると

空から何かがゆっくりと舞い降り、はやての手の平へと納まった。それは魔導の器の欠片。既に力は微塵も残されていない入れ物に過ぎない。けれどそれは、リインフォースがこの世に確かに存在した証でもあった。

「リインフォース……」

はやては小さな欠片を胸に当て、そつと大切な何かを呟いた。

儀式は終わった。一瞬、その光景に心を奪われていた面々は慌ててはやてへと駆け寄った。

俺は少し離れ、大きな木に背中を預ける。コートのポケットからタバコを一本取り出し、火を付けた。別に吸う訳ではない。これは癖みたいなものだ。仲間が死んだ時、俺はいつもこうして煙を眺める。最期に一本吸いたいと言って、結局吸う前に死んでしまったアイツの代わりに火の付いたタバコを一本捧げる。

「ガトウ

……今そつちに一人行ったよ。良い奴だから仲良くしてやってくれ」

「主」

俺を探していたのか、俺の姿に気付くと同じ木に背中を預けて隣り合う。

「辛いな」

「何ですか？」

肩を抱き寄せ慰め合う少女達の姿を眺めながら、不意に感情が漏れ出す。胸に鈍い痛みが去来する。

「いつも思う。もっと俺に力があれば 何とかなったんじゃないかって」

例えば、エヴァの『人形使い』のスキルがあれば、リインフォースの人格だけでも寄り代に移せたかもしれない。

そんな知識は持っていないし、向こうとの行き来が出来ない以上、無い物ねだりなのだろう。

今日という日を忘れないように、最後に天を仰ぐ。

どうしてだろう。昨日はあれだけ美しく感じた雪景色が、今日は何だか悲しく見えた。

想い／幸せの欠片（後書き）

今回、リインフォースとの別れのシーンでしたが悩みました。

本文にもありましたが、チャチャゼロの様に魂を人形にいれる等の方法でリインフォースを生存させるかどうかで……

ただ、そうしてしまうと、はやての成長に繋がらないですし話の流れ的に微妙だったのでませんでした。

・次回予告・

あの日から六年の月日が流れた……

彼女達も大きな成長を遂げた。そろそろ俺の役目は終わりだろう。

「俺はノアに世界を見せてやりたい。

心配するな

もし、俺の助けがいるなら俺の名を呼べ。俺はいつでもお前の味方だ」

次回『旅立ち』

今回の反省『原作に沿わせすぎると収拾がつかない』

旅立ちの想いは一枚の紙に残し（前書き）

かなりの短さですが、『A・S編』のエピローグその1です

旅立ちの想いは一枚の紙に残し

「そろそろあいつらも集まっている頃か……」

リインフォースが消滅してから六年の月日が流れた。結局、俺達はリインフォースの願いを護るために八神はやての家に居候させてもらった。最初は難色を示していた守護騎士達もしばらく経つと慣れてきたのか、受け入れてくれた。毎日が騒がしかったが、久しぶりにのんびりとした時間を過ごせた。

戦に狂気を奔らせることもなく、平穏という言葉に相応しい。今までの人生でここまで楽しかったのは人生二度目。一度目は既に失われ蘇らせることは出来ないが、それでも俺にとっての安息であったことには変わりない。

けれど、心の何処かに暗い陰がざわめく。お前の相応しい場所はどうりとした闇の中だと囁いてきた。俺はソレを否定しない。ただ、今はこのゆるりと流れる穏やかな時間に身を任せていた。

あれから六年

時間が経つというのは本当に早い。時から切り離され停止した俺からすれば羨ましい限りだが、彼女達の成長する姿は微笑ましくもあった。

高町なのはは管理局で戦技教導官をしているらしい。真つすぐな瞳をそのままに今も忙しい日々を送っている。

フェイト・テストロッサ 正確にはフェイト・T・ハラオウンというらしい。詳しくは興味が無いので聞いていないが。そんな彼女はクロノと同じく執務官の資格を取り、最前線にて仕事に追われている。

最後に、八神はやて。彼女が一番成長したかもしれない。障害だ

と思っていたが、足の不随は『闇の書』による影響だったらしい。長くりハビリに励み、自らの足で大地に立った時は、嬉しそうに涙を流していた。

「主、船がそろそろ出航するそうです」

埋没しかけた意識がその言葉に浮上する。ノアがそわそわした様子で駆け寄ってくる。ノアもまたこの六年で成長しただろう。何より感情を表すことが多くなった。感情は他者との刺激によって成長する。八神家に世話になったのは彼女にとっても間違いはなかった。

「別れの挨拶は良かったのですか？」

「構わんさ、手紙はクロノの坊主に渡してある」

影の倉庫に何故かあった一枚の便箋。前の世界で、魔法使いが多く使った、映像として言葉を残す魔法の手紙。それに言葉を残しておいた。

「さあ世界と一緒に見に行こうか、ノア」

「私はどこまでも主と共に」

恭しく頭を下げるノアを横目に俺を置いていた大きめのトランクを持ち上げる。

ここは、管理局のお膝元『ミッドチルダ』のとある次元艦の港。これから俺達は客船に乗って旅に出る。この世界の事を知りたいというのもあるが、一番の理由はノアに世界を見せたかったからだ。身体もなく『闇の書』の中にいた彼女に自分の身でいろいろなもの

を体験して欲しい。

行く先も決めていない奔放の旅路。ノアも無表情ながら、雰囲気
で期待しているのが分かる。

新たな世界に期待を胸に、俺は一步踏み出した。

旅立ちの想いは一枚の紙に残し（後書き）

次回のエピソードその2をもって『A's編』終了です。そのあと何話か、番外的な物を書いて『Striker's編』に突入する予定です。

旅立ちの想い一つ心に秘め（前書き）

さて『A・S 編』最後となりました。少しでも多くの皆様に楽しんでいただければ、と思います。

旅立ちの想い一つ心に秘め

午前の授業を終え、八神はやて等の三人は久々に、当時の『闇の書』事件のメンバー全員で集まる事になっていた。

「久しぶりに全員集合。まるで同窓会やねッ」

三人は学校で顔を合わすことは多くても、既に他の面々はそれぞれの道を進んでいる。だからこそ、全員が集まる今日という日を、八神はやては本当に楽しみにしていた。今現在、八神はやてと守護騎士達は時空管理局の捜査官としてロストロギアを中心とした古代の遺産の調査を中心に活動が続けている。自らも『夜天の書』というロストロギアの被害者である以上、こういう道に進んでいるのも当然なのかもしれない。

「そうだね、はやてちゃんッ！！わたしも楽しみだよお」

隣を歩いていた高町なのはも上機嫌だった。彼女もまた管理局の戦技教官として働いている。大きな事故を乗り越え、自分と同じような人を増やさない為にと日夜、訓練に明け暮れる日々。どれだけ身体が成長しても頑固で真っすぐな瞳は今も前を向いていた。

「クロノ達は既に待つてるみたいだから急がないと」

はしゃいでいる二人を窘め、先を急がせるフェイト・T・ハラオウン。少しだけ困った顔をしているが彼女自身、ほのかに緩む口許を見ると二人と同様に楽しみなようだ。一度目を落ちたものの二度目の執務官試験に合格し、現在も最前線で使い魔であるアルフと共に戦っている。

そんな三人は、桜舞う街道をゆったりと歩く。時折、桜並木の景色に心奪われながらも目的地へと向かっていた。目的地はあるホテルのレストラン。人数が多いこともあってクロノの母、リンディが張り切りすぎて貸し切ってしまったらしい。その話を聞いたはやとなのは苦笑い。フェイトも母親の暴走に申し訳なさげだ。それでも全員合わせれば十人以上、しかも魔法関係者。そういった意味では、貸し切ってしまったえば魔法の秘匿の面でも問題が無い。

「　　そういえば、遊馬さん達は？」

ふと思い出したのか、なのはがはやてに尋ねた。しばらくははやては考え込む。余り人付き合いが好きではない神風遊馬。ただ朝会った時には特に変わった様子もなかった気がする。

「遊馬にい達も来るとちやうかな。少し用事がある言うて朝から出てったけど、シグナム達も来るし……」

自身なさ気に答えた。はやての家に居候していても、どこと無く謎めいた人物。雲を掴むような捕え所のない雰囲気。それでいて相談事に対するアドバイスは的確なのだ。

年上ということもあってか悩み事を相談することも多く、三人にとつては兄のような存在だった。なのはやフェイトには実際に兄はいるものの魔法関係や管理局での人間関係なんかは相談出来ない。そういう意味でも神風遊馬という存在は非常に大きく頼りがいがあった。

そんな話を話している内に目的地へと到着した。既に残りのメンバーは中で待っているらしい。案内に促され、レストランに入ると豪華な料理がはやて達を出迎えた。

「すっごい豪華だね!!」

「母さんが手を回して、ここにいるスタッフ全員が魔法関係者なんだって」

三人とも料理の数々とレストラン内の格式高い内装に目を輝かせている。

「三人共、早くこっちに来い。アルフが待ちきれないみたいだしな」

既に座っていたクロノに言われ赤毛の少女　アルフの方を見ると、涎を垂らさんばかりに食い入る様に料理を見つめている。その姿にクスリと微笑んで並んで空いている三つの席に腰掛けた。

「今日は皆集まってくれてありがとう。」

こうやって皆が集まるのも僕の提督就任以来だが、今も皆のこうやって元氣な姿を見て嬉しく思う。

それぞれ皆が違う道に進んでいるが想いは一つ。これからも頑張っていこう!!

乾杯　　!!」

クロノの言葉に全員がグラスを掲げ、パーティーは始まった。

話に出るのはお互いが出会うきっかけとなった『闇の書』事件。そして今までの近況報告で場は盛り上がっていく。

しばらく食事や会話を楽しんでいたはやてだったが、何となく辺りを見渡すとそこには未だに人の座らない空席二つ。そして姿を見せない遊馬とノア。

「なあなあクロノ君、遊馬にい達の事、何か聞いてへん？」

不審に思つて小さな声ではやてが問い掛けると、クロノ一瞬顔を伏せ胸元から封筒を一枚取り出し渡す。遊馬からだ、そう付け加えて。その封筒は特に変わった様子もない。可愛らしい装飾もない手紙用の小さな白い封筒。その簡素さに確かに遊馬からの物だろうと笑い封筒を開ける。

「手紙……？」

内容を見てはやては首を傾げる。はやてが不思議がるのも当然だ。無地の便箋に書かれていたのは【親愛なる八神はやてへ】という言葉のみ。左下には、ビデオデッキの様な再生ボタン。

そつと再生ボタンに手を触れると微かな魔力反応と共に遊馬とノア、そしてマリアの姿が立体映像として現れる。

「すごい……」

「こんな技術、本局の技術部でも見たことない」

気付けば、ここにいる全員が集まり映像を見つめている。重苦しいほどの静寂。

皆が理解していた、この手紙が最後になるかもしれないと。

「さて、久々に俺を見た人もいるだろうから久しぶりだ、と言わせてもらおうか」

そんな一言から最後の言葉が始まった。

「リインフォースが逝ってから六年か……月日は早いな。小さかったガキ共が、こんなに成長してな」

口は悪いが温かく、そして優しい言葉。

「お前らは知らないだろうが、リインフォースが逝く瞬間に俺に頼み事をしてきた。【主はやてを一人前になるまで護ってください】とな」

はやて、そして守護騎士達は驚き涙を流した。リインフォースが今も護ってくれていた、その思いがはやての頬を濡らす。

「それから六年。まあ、長いような短いような時間ではあったがお前らは管理局での勤めを果たし、多くの実績を残してきた」

思い出すのははやて達が捜査の帰り、夜遅くなって家に帰るといつも遊馬達が夜食の支度をして待っていてくれたいた。

管理局員でもなく囑託魔導師でもない遊馬なりの優しさで、彼なりに考えた上ではやてを護る、はやての家を護っていたのかもしれない。

はやて達の相談に乗ってくれたのも、彼女達が間違った道に進まぬ様にするため。それに気付くと胸の奥から熱いものが込み上げてくる。それははやてだけでなく、なのもフェイトも同様だった。抑えきれない思いが嗚咽となって漏れる。

けれど、そんな思いを向ける相手はここにはいない。

「お前はもう一人前だ。

お前らはそれぞれの正義の為に進んでいくだろう。そうなれば俺

がお前らの側にいれば迷惑になるだろう」

そんな事ない。

そう言おうとしたはやてを遮る形で遊馬の言葉は続く。

「前の世界での俺は人殺しだ。言い訳も何もない。どれだけの大義名分があろうと、その事実は変わらない」

「仲間を護るため、そのために俺は多くの命を壊してきた。俺は前の世界では『終焉』と恐れられ、恐怖と恨みの対象として生きてきた。そんな俺がお前らと共に生きていくのは 難しい」

昔、遊馬ははやてに言った。

“『非殺傷設定』があるこの世界の魔法は好ましく思える”

当時は何となく聞いていた言葉。その言葉の重みをはやてはようやく理解した。

「今までの六年 騒がしくもあつたが、俺にとっては本当に幸せの日々だった。はやてに守護騎士たち、そしてなのはにフェイト ありがとう」

立体映像の遊馬は笑んで頭を下げた。そして言う。リインフォースの頼みは叶えた、と。

「これから俺達はこの世界 次元世界を見て回ろうと思っている」

ノアに世界を見せてやりたい。彼は笑顔でそう言った。

「だから、しばらくお別れだ。いつまでかも決めてないが 軽く
三年ぐらいかけて色々な世界を見て回ろうと思っている」

今生の別れではないと分かり、安堵の吐息を漏らす面々。

「最後に、兄貴らしい事をして終わろうと思う。そこにいる全員は、
心して聞け」

涙を流していた面々も、そしてただ見ていた面々も真剣な面持ち
で画面上の遊馬を見つめる。

「力とは何か 以前、はやてが俺に尋ねてきた事だが覚えている
か？」

「覚えてるよ。『力とは言葉だ。そこに想いが無ければ、ただの暴
力ではない』 やね」

頷き答えるはやての目は赤く腫れている。けれど、遠く前を見つ
めていた。

「意思のない力はただの暴力。けどな、意思があるだけでは意味が
無い。力に意思が籠り、初めて善悪が力に生まれる。

けれど、それでも人は過ちを犯す」

自らの無茶で怪我をし、再起不能寸前まで追い込まれたことのあ
るなのは表情は暗い。

「だから、自分達の背中に大切な誰かを想い続ける。大切な誰

かの笑顔の為に戦っていることを心に刻め。そして、その大切な人が自分達の安全を願っていることを忘れるな」

大切な誰かの為に命を賭ける。それは間違っていると、遊馬は告げた。

「話は以上だ。またどこかで会おう」

その言葉を最後に映像は消える。

「遊馬にい ありがとうな」

上を向き、そっと呟くはやて。感謝の言葉が届くように手紙を胸に当て、想いを込める。

「すまない、はやて。神風からお前に伝えるなと言われていた。神風達をミッドチルダのポートまで送ったのは僕だ」

俯き加減でそう伝えるクロノ。けれどはやては慌てたように手を左右に振る。

「気にせんでええよ。もう会えないって訳でもないんやから……」

そう言って笑う表情はどこと無く寂しそうだ。そして、手紙を封筒に戻そうとした時

「 ちょっと待って、はやてッ！！何か浮かんで……」

何かに気付いたフェイトが声を上げる。

最初の文面の直ぐ下、空白になっていた部分が光り輝き始めうっすらとだが新たな文字を露にする。

そこにはこう書かれていた。

『もしも俺の力が必要なきがくれば俺の名を呼べ。いつでも、どこにいても大切な“妹”のために駆け付けよう』

そして最後に差出人としてこう記されていた。

『八神遊馬』と。

神風遊馬としてではなくはやての兄『八神遊馬』として書かれていたその言葉にはやての瞳から涙が零れ落ちる。

それは今まで感じたことのない温かなものだった

旅立ちの想い一つ心に秘め（後書き）

現在のアクセス数……

『約25000アクセス』

マジで！？

今まで見ていただいた皆様、ありがとうございます。ホントに感謝感激です

これから先は何話か番外編の投稿を考えています。内容としては本編とはほとんど関係のない二話。そして本編と深く関わりそうなものを一話考えています。

・次回予告・

『闇の書』事件の約一ヶ月後、のんびりと過ごしていた八神家の面々だったがシグナムの一言から平穩は終わりを告げる。

「手合わせ 願えますか」

次回『戦闘狂〜平穩を望む日々』

戦闘狂〜平穩を望む日々（前書き）

今回の話で初めての本格的な戦闘描写が出て来ますが……何となく納得出来る程のものが出来ませんでした。

感想やらでガシガシ指摘してください。今後の励みにしますんで

m (_) m

戦闘狂く平穩を望む日々

ある日のこと、守護騎士達のリーダーである桃色の髪を後ろで纏めた少女　シグナムが頭を下げてきた。武士然として鋭い目付きの少女の立ち振る舞いは正に『剣の騎士』に相応しく凜としたものだ。そんな彼女が頭を下げ頼み込んで来たのだから、かなり緊急性の高いモノに違いない。

そう思つてソファアにだらけていた身体を無理矢理引き起こし、シグナムと向き合う。今現在、部屋にいるのは俺とノア、そしてシグナムの三人だけ。は yet はリハビリのためシャマルを連れて病院へ。ヴィーダとザフィーラは散歩だ。

ザフィーラは八神家唯一の男だけあつて俺と良く話をすることが多い。一度、ザフィーラを誇り高き男と呼んだらひどく感謝された話を聞くと周りの守護騎士からも犬扱いを受けるらしい。は yet 自身、ザフィーラをペットとして認識しているようで、そのことが守護獣としての矜持を揺さぶるらしい。

そんな事を思い出している所に掛けられた言葉に絶句する。

「私と　手合わせ願いたい」

「……はあ」

少しばかりの沈黙と共に吐き出される溜め息。真剣な面持ちのシグナムから出た手合わせという言葉は、俺の今日一日のやる気を消沈させるには十分過ぎるほどの威力を発揮した。俺自身、『終焉』と恐れられるほど修羅の道を歩んできた人間だ。だが、だからといって殺人狂でも無ければ戦闘狂でもない。むしろ自分の中に戦う理

由が無ければ好き好んで戦いはしない。

「面倒だ」

だからこそシグナムの申し出を一刀両断に切り伏せた。

「な、何故ですか？」

「俺には戦う理由が無い。むしろ何でそこまで手合わせを望む。せつかくの休日だ。のんびり過ごせばいい」

「それは……」

あからさまに言い淀む。けれど、目が俺に訴えかけてくる。濁り、くすんだ瞳。この目の意味を俺は良く知っている。

迷い……か。

「仕方ない 受けてやる。場所の手配ぐらいはやってくれ。流石に庭でやるわけにはいかないしな」

「感謝する ありがとう」

そう言って通信端末でどこかに連絡を取っているシグナム。おそらくアースラの訓練室を借りるのだろ。別に場所がどこであろうとあまり関係はない。

ソファから立ち上がり、部屋を出る。とりあえず、ノアを起こすしよう。そう思っていたのだが部屋を出た瞬間、目の前に立っているノアの姿に驚かされた。

「 よろしいのですか? 」

ノアから聞こえてくるのはその一言。手合わせを受けた事。そして戦いが好きではない事。そのどちらに對してでもない。おそらくノアも理解しているのだろう。今のシグナムが危うい事を。

「 大方 はやてを護るために、とか罪の意識なんかで色々考えているんだろう 」

『 ただ強くなりたい 』というだけならまだ御しやすい。けれど、シグナムは違う。強くなりたい理由を持ちながら考えすぎている。柄にもなく、だ。

「 まあ、リインフォースの頼みに直結するかわわれれば微妙な所だが 迷える子羊に少しかり手を差し出すのも悪くないだろう 」

『 ソウルノア 』の人格の器でありデバイスの待機モードでもある右中指に嵌められた銀の指輪。十字架に髑髏のあしらわれたそれを撫で、照れ臭く頭を搔く。

「 多分、ノアとのユニゾンまでする必要はないと思うが どうする? 」

「 私は常に主の側に デバイスの演算機能向上のため、私も器に戻りましょう 」

そんな言葉と共にノアの姿が白い球体へと変わると、指輪の中に溶けるように消えてしまった。

「 悪いな 少しかり迷惑をかける 」

《気にしないでください》

ノア自身、デバイスに戻るのをあまり好まない。道具として扱われるのを嫌うのもあるが、会話の際に電子音となるのがなにより嫌いなのだ。そのため、今のような状態の時は必ず念話での会話をしてくる。他人からすれば独り言を呟く変人に見られる為、俺も念話での会話を心掛けている。

「まあ、何に迷ってるか知らないし興味もないが　俺も修羅に身を置き刃で道を切り開いてきた男だ。先に行く先達者として、少しばかり先を切り開いてやろう」

小さく笑んだ表情がどう映るかは分からないが、出来れば優しい笑みであつたことを祈ろう。

訓練室の使用許可は案外すんなりと取れた。というのも『闇の書』事件における中心人物でありアースラ内での戦力の核であつたフェイト・T・ハラオウンを退けた実力者であるシグナムと突然現れ十人の魔導師を手玉に取り、尚且つ魔力量がロストロギア級の俺。そんな二人の手合わせだ。情報はあればあるほど良い。だからこそ、艦長であるリンディも二つ返事で許可を出したのだろう。とは言え、そんな状況である以上本気を出す訳にもいかない。個人的に2クロノ達は気に入っているものの、管理局という正義を振りかざす組織は好きではない。むしろ嫌悪感すら感じるレベルだ。あくまで手合わせなのだから本気でやる必要はそもそもないが、シグナムの目を醒まさせる為にも真剣にはやるべきだろう。

そんな事を内心考えている内にアースラの訓練室へと案内された。

「来たか……」

立ったまま瞑想していたシグナムが何もない、ただ広いだけの室内に佇んでいた。俺の気配を感じ取ったのか、目を開き俺を射殺さんばかりの闘志を持って俺に相對する。

「頑張るんや、シグナム!!」

遠巻きには守護騎士とはやての姿が見えた。話を聞き付け、応援に來たのだろう。そんな主の声援に応えることなく、腰を落とし鞘に包まれた劍の柄に右手をそっと添える。極限までの集中を持って生み出される緊迫感。

「『ソウルノア』セツトアップ」

シグナムの闘志に応えるべく、俺も騎士甲冑に身を包み二振りの小太刀を下段に構える。氣迫を高めながらもあくまで自然体に構える。

余分な力を抜き、ただ体の赴くままに。

「始めようか」

空氣が乾き、張り詰める。先程まで騒がしかったはやて達も無言で俺達の方を見つめている。

開始の合図も無く、お互いの呼吸をもって演武の幕は上がる。

シグナムとの距離は約五メートル。お互い踏み込んだ瞬間に命懸けの戦いが始まる、そんな距離。そんな状況でありながらただただ、自然体で構える。

「ハアッ！！」

刹那 水面下の駆け引きに痺れを切らしたシグナムが、一気に距離を詰めてくる。鞘から抜かれると共に煌めく斬撃。脇から俺の胴を斬り裂かんとする一撃を俺は受けるでもなく躲すでもなく、そつと剣の腹に左手に握られた小太刀を添える。そのまま半歩左足を踏み込み懐に潜る反動を利用して、虚空へとシグナムの剣の勢いを逃がす。更に左腕を引き体の軸を回転させ、右腕の小太刀を振り払う。

剣の勢いのままバランスを崩しているシグナムは避ける事が出来ない。咄嗟の判断で空いている左腕を翳し、無詠唱でのバリアを展開する。剣撃が障壁と衝突し閃光を放つ。完全に力は拮抗し、障壁を破壊するには至らない。あくまで小太刀を振るう腕は一本ずつ。根底に存在するのは力ではなく速さでの連撃だ。いくら利き腕であろうと障壁を抜く事は不可能に近い。その間にもシグナムは体勢を建て直す。このまま押し切ることは無謀でしかない。そう判断して、バリアの反発を利用して後方へと跳び退く。

着地までの数瞬、シグナムは追撃には来なかった。どんな判断を下したかは分からない。ただ、今まで以上の警戒を感じ取れた。

再び距離が開く。

「来ないなら、こちらから行こう！！」

宣言して大きく踏み込み連撃を放つ。縦横無尽に剣が舞う。それをシグナムは自ら剣で受けるが、手数に勝る俺に分がある。段々とシグナムが後方へと追いやられていく。

「おいおい、このままじゃないよな？」

軽い挑発。いつもなら受け流せる様なものだろう。けれど、精神

状態の不安定な今の状況のせいで完全に怒りに顔を染める。

「舐めるなあ！！」

俺の剣撃の間を縫うように、剣を斬り上げる。完全に予想通りの展開だった。その一撃を瞬動で躲し、一気に後方へと回り込む。

「これで終いだ」

勘を頼りに逃げようとするシグナムの左腕を掴み、引き寄せる。踏ん張りが効かずに体勢を崩したシグナムの脇腹に膝を叩き込む。

「なッ！？かはッ」

騎士甲冑にダメージそのものは防がれても衝撃は抜ける。肺から空気が漏れだし瞬間的な酸素不足を引き起こす。

「お前が何を悩んでいるのかは知らない。けどな、お前は剣の騎士だろう？何のためにその剣を振るうのかもう一度考えろ！！」

動けないシグナムにそう告げ、距離を開け、必殺の一撃を振りかざす。右腕を掲げ、左腕は下段に構える。

「カートリッジ！！」

俺の言葉にそれぞれ一発ずつ計二発の薬莢が排出される刀身が魔力によって漆黒に染まり、俺の目の前には巨大な魔法陣が浮かび上がる。更にその魔法陣はゆっくりと回転し、周りに霧散している魔力を表面へと集め、押し止め、三角の魔法陣の中心にバスケツボール大の魔法球を作り出す。

「神風流ベルカ式収束剣撃『神槍三破』！！」

構えていた右腕を振り下ろすと同時に、左手の小太刀で突きを放つ。その魔力の斬撃が魔法陣を通ると、魔力球からの一撃も発射され三つの魔法が螺旋を描き、轟音を響かせながらシグナムへと直撃した。

辺りは土煙が上がり、シグナムの姿は見えない。けれど俺は残心することなく小太刀を鞘に戻し土煙の中に足を踏み入れる。

土煙で良く見えないが、俯せに崩れ落ちているシグナムの姿がぼんやりと目に映る。近づいてみると、騎士甲冑のあちこちに裂傷が見受けられるものの、身体には擦過傷程度のモノがちらほらあるくらいだ。気絶しているものの重傷というほどでもない。シグナムの身体を慎重に反転させると、そのまま抱え上げる。

「医務室まで連れていく。シャマル、傷の手当をしてやってくれ」

心配そうにこちらに駆け寄ってくるはやて達にそう伝えたと、クリーム色の髪をしたおっとりした印象を受けるシャマルは頷く。それを確認し、訓練室を後にした。

医務室に着くと空きのベッドにシグナムの身体を横たえる。誰もいない状況を見ると、診察医は不在らしい。後ろからはやてとシャマルがシグナムの様子を覗きこんでいたので、後の処置を任せて部屋を出た……。のだが部屋を開けた途端、巨大な鉄槌を目の前に突き付けられていた。

「何のつもりだ？」

一瞬うろたえたものの、はやて達に気付かれないように扉が閉まるのを待ってから話し掛けた。

「何でシグナムにあそこまで攻撃したんだよ！！最後の一撃は余計だろうが」

不機嫌そうな目で俺を見上げるヴィーダに内心呆れる。どうやらこの少女はシグナムの不安定さに気付いていない。いや、むしろ気付いているのに気付かないふりをしているのかもしれない。

「シグナムに伝えておけ。お前がどれだけ悩んでいるかは知らんが、答えなどありはしない。

ただ、そのまま進めば修羅の領域に足を踏み入れる事になる。お前が誰のために、何のためにその剣を振り下ろすのか。その理由をもう一度考えてみる　とな」

彼女を無視して廊下を歩く。後ろから声が掛かるが無視する。案の定追っては来ない。

「さて、修羅らしいことをしようか……」

「お供します、我が主」

隣に現れるノアは静かに佇む。彼女にとってそれが当たり前だから。足をそのまま進めやって来たのはアースラの核、管制室。恐らくここにリンディとクロノがいることだろう。扉には厳重なロックが掛かっていた。

「ノア」

「かしこまりました」

俺の意図を理解し、ノアはロックの掛かった扉には手を当て目を閉じる。しばらくの間そうしていたが、満足げに目を細め嗤う。

「解析完了。ロック解除します」

空気圧の抜ける音と共に目の前の扉が開く。よくやった、と彼女に感謝し大胆にも管制室内へと足を踏み込んだ。

「貴様ア、何のつもりだ!!」

予想通りの面々が揃ってこちらを見ていた。リンディ提督にクロノ執務官。更に短めの茶髪の活発そうな少女。恐らくエイミィだろう。はやて達から出てくる特徴と一致する。

「何のつもり、か……それはそのままお前達に返そう。俺の戦闘データを調べて何のつもりだ？」

三人が見ていたモニターにはちょうど俺がとどめの一撃を放つ場面が映し出されていた。

「どういふつもりかは知らんが、俺との約束は覚えているだろう」

どす黒い、何かが管制室を支配する。殺気とも闘志とも異なる波長。

「お前達が約束を違えた以上、どうなるかは解るだろう？リンディ提督殿」

この一言で立場が逆転する。俺の戦闘の様子を見ていたからこそ理解する。敵わない。ここで完全に敵対すればアースラだけでなく、管理局そのものの存亡に関わると。

だからこそ俺からの言葉を待ち続ける。リンディはただ無言で相対し、クロノは少女を護るように前に出ているが足が震えていた。エイミイは顔を青くし震え上がり、成り行きによっては死を覚悟していた。

「まずは今回の戦闘データの破棄。それから俺の事を一切上に報告しないこと。俺からの要求はその二つだけだ」

リンディは小さく頷き、エイミイに目配せする。指示を受けたエイミイは焦りに身を強張らせ、必死にコンソールを叩く。辺りに響く電子音は不快な程乱雑に不協和音を響かせながら、モニターの画面を消していく。

「一つ、訊きたい事がある」

作業が終わるのを待ちながらクロノが不意に口を開いた。

「何故そこまで管理局への協力を拒む。貴様の实力があれば多くの人が救われるだろう？」

救うか。その言葉がどれだけ傲慢なモノかをこの少年は理解していない。

「まあ、個人的にはお前達の事は嫌いではない」

そこまで口にし、狂気を霧散させる。これ以上の脅しは必要ないだろう。空気が変わったことに三人とも肩を撫で下ろし息を吐いた。

「お前は経験不足だが確固たる信念を持っているし、提督に関しては柔軟な対応、更には部下からの信頼も厚い。俺からすれば信頼に値する」

だがな、と警告。一瞬にして三人の表情は変わる。

「管理局という組織は気に入らない。『正義』を盾に『管理』する。それがどれだけ傲慢な事か理解しているか？」

それぞれの世界にそれぞれの制度が存在し、そこには色々な生物が存在する。文明が違えば言葉も異なる。そんな多種多様な世界を『管理』する。それは傲慢な物言いだ。

「そしてもう一つ。

組織というのは大きくなればなる程、闇の部分も出て来る。権力を盾に非道を行う外道が集まる。そうだろう？」

横目でリンディを睨みつける。提督という立場にいる以上、必然的にそういった裏の部分を目にすることも多いだろう。それが間違った行いであったとしても権力をもって揉み消される。

俯き無言で悔しそうに拳を握りしめるリンディの姿にそれが事実であるとクロノは悟った。

「まあ、駄目押しになるが一つ管理局の闇を見せてやる」

自らの端末を操作してある人物のリストをモニターに映す。

「これは？」

「『夜天の書』の改変者のリストだ」

『ソウルノア』に残っていた記録を基にリストを作成した。抜けている部分もあるが、それでも分かっているだけで二十一人。その中の一人の名が赤くなっていた。

「この赤字の人物は管理局の当時三佐だった男だ」

何十年も前の話であるが管理局の局員が改変している。その事実が三人の顔を強張らせる。

「恐らく管理局のデータにこの人物はないだろう。確実に揉み消されているだろうからな。」

俺が管理局という組織に入らない理由は理解できたか？俺という存在、更に『闇の書』の防衛プログラムの残滓であるノア。それが上層部に知られることがどれだけ危険なことか解るだろう」

いつの間にか作業を終えたエイミイも俺の提示した資料を見て考え込んでいる。自らの正義それを見つめ直しているのかもしれない。それが出来る少年達の姿は好ましく思えて、さっきまでとは一転して小さく笑んだ。

「お前達は気に入っている。もし俺の力が必要なら力を貸してやる」

俯くクロノの頭をポンと撫で、彼等の言葉を聞かずに部屋を出た。

「シグナムの様子を見に行くか」

手合わせが終わってからそれなりの時間が経っている。もう治療も終わり、目も覚めている頃だろう。

「優しいですね」

俺の言葉に場違いな微笑みを見せるノアに顔を背ける。

「手加減はしてあるが、あれも一応女だ。傷が残るのも困るしな」

自分の言葉がノアを調子づかせる言葉分かっていたが言ってしまった。

そんな俺の台詞に笑みを濃くするノアを無視して足早にその場を逃げた。

医務室に入るとそこは異様な光景だった。ベッドから飛び起きたんばかりのシグナムにそれを必死に押さえ付けるヴィーダと人間形態のザフィーラ。少し離れた所に避難していたはやてとシャマルは軽く頬を引き攣らせている。

「何があつた……」

その光景に俺も言葉が出てこない。

「師匠!!」

師匠……？

そんな台詞を吐いたのはシグナムで、俺に気付くとヴィーダ達を跳ね退け一目散に俺の元までやって来た。

「ありがとうございます」

俺の右腕を両手で握り、深々と頭を下げるシグナム。

「迷いは、晴れたか？」

「はい！！」

返事と共に頭を上げるシグナムの瞳には迷いによって生まれていた澱みがない。どうやらふっ切れたらしい。その様子に満足するが、どうも態度がおかしい。

「師匠、お尋ねしたいことがあります」

先程から俺を師匠と呼んでくる。理由をヴィーダに念話で尋ねる。

《自分を手玉に取った上に、自分の迷いを晴らしてくれたからだつてよ》

迷惑な話だ。そんな俺の溜め息に気付かずにシグナムは言葉を続ける。

「どうやって私の騎士甲冑を抜いて膝蹴りの衝撃を通したのですか？更に最後の魔法は一体なんですか？」

矢継ぎ早に放たれる言葉。何と言うか、確かにいつも礼儀正しく凜としていたが、ここまで丁寧に尋ねられるのはあまりに異常だ。非常に背中が痒い。無視したい所だが、爛々と輝くシグナムの瞳がそれを許さない。何となくだが犬耳と尻尾が見えた。

「とりあえず説明はしてやるが……」

「訓練室に行きましょう!!」

俺がそう言った途端、物凄い力で引きずられる。何故かその後ろをついて来るはやて達。その表情は笑いを堪えていた。

《とりあえず助けてくれないか?》

《いやや、面白いし》

どうも俺の姿が面白いらしい。こちらとしては欠片も面白い訳がない。

《というか何故ついて来る》

《我等の甲冑を抜く打撃。我等も気になるのだ》

答えたのはザフィーラだった。確かに魔導師にとっては切り札に成り得る。騎士甲冑やバリアジャケットを抜いて打撃を与えるのだから。何より、不用意に傷付けずに済む。

そんな事を考えつつも勝手に身体は引きずられるのであった。

訓練室に着くと、そこには何故かホワイトボード。更に人数分の椅子が用意され最前列にはクロノとエイミィ、更にリンディが当然とばかりに鎮座していた。

もう呆れるのも面倒だ。

「もういい。お前達は座れ」

諦めて座るよう促し、俺とノアはホワイトボードの両端に立つ。

「俺が甲冑を抜いて衝撃を加えた技術だが、『透し』と言われるものだ。中国拳法では『浸透勁』ともな。『浸透勁』は内臓に衝撃を加える打撃なのだが『透し』は少し背景が異なる」

ホワイトボードにスラスラ文字を書きながら言葉を続ける。

「『透し』は戦国時代、刀もなく無手で戦う状況によって生み出されたモノだ。はやて、鎧に身を包んだ男に素手で戦うならどうする？」

「んー、鎧の守ってない関節とか顔面を狙うかな」

俺の問い掛けにしばらく考えてそう答えた。

「それも正解なんだが、鎧の合間を縫った攻撃というのは非常に難しい。ピンポイントにそこを狙う。それはかなりの技術が必要だ。そこで生み出されたのが『透し』。鎧を抜いて肉体に衝撃を加える技だ。」

まあ、解説はここまでにして実演しようか。ザフィーラちょっと騎士甲冑を展開してこっちに来てくれ」

言われた通りにやってくるザフィーラの腹部に掌を当てる。ベルカ式の騎士甲冑はミッド式とは異なり物理ダメージに対する防御に優れる。

ザフィーラに腹筋に力を入れるように注意して掌から衝撃を叩き込む。

「グッ……！！」

苦しそうに呻くものの、それでも倒れる程ではない。

「『透し』の欠点としては威力が弱い事だ。だから、急所を狙うか不意を突くのが定石だ」

だからこそ、俺は不意打ちで後方からシグナムの脇腹を狙ったと伝えると全員が納得とばかりに頷いた。

「ああ、ただミッド式の魔導師にはかなり効くぞ」

ミッド式の魔導師は砲撃が主体。そのためバリアジャケットも魔法攻撃に対する防御に特化している。威力が弱いモノの簡単にバリアジャケットを抜いてしまえるのだ。

そもそもミッド式には近接格闘の概念があまりない。シューティングアーツやストライクアーツなどはあっても、あくまで魔法が主体となっている。そのため格闘技が発展を遂げていない。逆に魔法のなかった地球では格闘技が数多く存在するのだから皮肉な話だ。

「とりあえずもう一つの方だが……」

正直、説明が面倒になってきた。

「高町なのはの収束魔法を元に俺とノアで調節したオリジナルの魔法だ。分類としては収束斬撃魔法だろう。これに関しては実演はしない」

これ以上の説明は切り上げる。問題はないだろう。話を聞いている連中の集中力も一人を除いて途切れかけている。説明を終わらせると、話をしながら去っていた。約三名を除いて。ノアは当然だが

シグナムとザフィーラの姿が残っていた。
何だか嫌な予感がする。

「師匠、稽古を付けてください!!」

「我も『盾の守護獣』だ。我の守りを抜く技術を学ばせて欲しい」

結局、押し切られる形で週に二度稽古を行うことになった。あくまで武術の稽古だったため、シグナムが通う剣道場を借りる形になったのが唯一の救いかもしれない。

「面倒だ……」

今日の始まりと同じ台詞と共に大きく息を吐いて、静かな一日が訪れる事を天に祈った。

戦闘狂〜平穩を望む日々（後書き）

ウカムルバスがソロで倒せない……

すみませんどうでも良かったですね。

今回の話で少しですがギャグ的なものにも挑戦してたりしますが、あまり好きではなかったり。

個人的な話ですが正義の味方という存在が嫌いだったりします。だから主人公をダークな感じにしたかったのですが……なんかツンデレなお兄さんになってしまってますね

評価のポイントが100ptを超えてテンション上がりっぱなしですが、そろそろダークな話を書いて路線を戻そうと思います。

・次回予告・

「贖罪ねえ

都合のいい言葉だな。黙っていれば自分は満足出来るだろうな」

言葉の刃が目の中の男の胸に深々と突き刺さる

「結果が良かった、ただそれだけだ。お前ははやてを殺そうとした。それを忘れるな

死にたければ勝手に死ね。お前の命になど興味はない」

次回『断罪の刃』

断罪の刃（前書き）

かなりの難産でした。まあ、この人たちの出番は二度と来ませんし。あまりにも印象が薄かったせいでキャラが掴みきれていなかったと反省中……

断罪の刃

あの事件から一週間程度経ち、はやても無事退院と相成った。はやては未だに足が不自由なままだが『闇の書』が無い今、リハビリを行えばしつかりと自分の足で大地に立てるようになるだろう。今のところは自分のデバイスを作成するために本局への出向を続けていた。あの日、リインフォースから受け継がれた欠片。それにデバイスを埋め込む算段らしい。俺としては彼女には平和に生きてほしい所だが、彼女曰く『夜天の書』の主としての責任として管理局での従事を決めた。これ以上は俺にはどうすることも出来ない。彼女の意志を尊重するべきだろう。

「でな、今から銀行に行きたいんよ。家族も増えたし、食費も掛かるしな」

今、俺ははやての車椅子を押し町の散策中だ。町の様子は前の世界と殆ど変化はないものの土地勘はほとんどない。一人で歩き回るよりはと、はやてに最低限の案内を頼むと快く了承してくれたため今に至っている。

食費に関しては自分の分ぐらいはと提案したが断られてしまった。

「そついえば、両親はいないようだが金銭はどうしているんだ？」

「ん？両親の友人のグレアムおじさんが生活費出してくれてるんよ」とある人物の名前。ギル・グレアム　はやての父親の友人で両親の死後、はやての援助をしてくれているらしい。資金援助、そしてはやてが『闇の書』の主であったこと。どうもタイミングが良い。偶然なのかも知れないが、こういう事は疑ってかかった方がいい。何も無ければそれでいい。あくまで保険。

「そうか……銀行までの案内を頼む」

「了解や!」

はやての表情は明るい。この優しい少女を護る。その決意を新たに、心の片隅にグレアムという名を残しておいた。

夕食も終わり、俺は一人郊外の森の中。今からの通信を他人に聞かれるわけにはいかない。俺は通信端末を操作してクロノとの回線を繋いだ。

「珍しいな。貴様から連絡してくるとは」

確かに滅多な事が無ければ関わりたくはない。けれど、そうも言っていない状況という奴だ。

「単刀直入に言おう。ギル・グレアムとの面会を求めたい」

ギル・グレアム　その言葉にクロノの表情は明らかに曇る。どうやら予感悪い方向に的中したらしい。

「彼は管理局を辞めている。連絡を取ることは可能だが、面会は難しい」

やはり管理局の関係者か。これは完全に裏があるらしい。少しでも情報を手に入れるために言葉を紡ぐ。

「はやてへの資金援助をしているらしいな。資金援助のタイミングからして何か理由があるはずだが？」

クロノの顔色が一気に青ざめる。今回の事件の裏側、その核を担うのがギル・グレアムという男なのだろう。しばらく逡巡していたクロノだったが、諦めたように口を開いた。そこから懺悔される真実は余りにも一方的なもので俺の狂気を加速させるには十分だった。『闇の書』を主であるはやてことの永久凍結。生かす訳でも殺すでもない。ただ、はやてという少女の命をもって停滞させる。はやてという存在は『闇』に捧げる人身御供といったところだ。

「気に入らないな」

結果としてリインフォースの消滅で解決したものの、それは結果論に過ぎない。はやての命で終わらせる可能性もあった訳だ。その事実は俺の中の闇を刺激する。

どろりと

器から悪意が漏れだす。

夜より深い闇が体中に蠢く。その感覚は何処か懐かしい。

ああ、これはあの時と同じだ。

「とりあえず面会の申し出を出しておいてくれ」

これ以上は我慢できそうにない。縛鎖を引きちぎらんばかりに暴れ回る内なる獣。

「分かった。アポは取ってみる。許可が出るかは分からんぞ」

「感謝する」

何か言いたそうなクロノを無視して強制的に通信を切った。

さてと、これからどうしたものか……あの時、暴走したおかげと言うべきなのは分らないが、以前よりは自制が効く。破壊衝動と理性が攻め合い混沌とした感情が渦巻いている。とは言え発散しないわけにはいかない。今の状態で八神家に戻れば彼女達を確実に壊してしまう。修復の余地も無いレベルで。それは避けたい。

「……管理外世界、無人世界……」

俺の闇に呼応してか、マリアがうつすらと姿を現す。中途半端な暴走のせいか半透明で向こうが透けて見えた。

それが妥当な所か……

この場で破壊を行えば確実にアースラに気付かれてしまう。

「ノア、この近くの無人世界の座標は？」

《X204 Y352 Z549が近いでしょうか》

融合魔法のテストにも丁度良いかもしれない。前の世界の影を使った転移魔法と、この世界の転送魔法の座標軸設定を複合させたオリジナル魔法。元々の転移魔法は遠見の魔法で影を見つけ転送するのだが、この世界での次元空間内の座標設定による転送と組み合わせた事で座標による転移を可能にした。ただ、あくまで影を媒介にした転送魔法なので、座標周辺の影にランダムに転移してしまう欠点もある。ただ、この世界の転送魔法のような大規模な装置を必要としないため手軽ではある。まあ、一長一短といった所だろう。

足元に複雑な模様が浮かび上がる。ベル力式の三角の魔法陣を囲うような形で影を操作し、前の世界の魔法陣を作り出す。見た目はかなりいびつな魔法陣だが試行錯誤の結果ではある。後はここから

余計な部分を削げ落としていくだけである。魔力の流れを見て術式が空転している部分を削除もしくは修正していく訳だ。

ただ、今はそんな余裕は無い。魔法陣にありったけの魔力を流し強制的に発動させる。

「 転移！！ 」

悪いな、はやて。今日は帰れそうにない。

夜の闇に孤独に輝く満月を見上げ、懺悔の言葉を口ずさんだ。

早朝、八神家に帰ってみると全員がリビングに丸まって眠っていた。人数分の毛布が掛けられ、時折もぞもぞと動く様は糞虫のようで何処か笑いを誘う。はやてやシグナムは穏やかな寝息を立てているが、ヴィーダは寝相が悪いせいで毛布がはだけて閉まっていた。年末の寒い時期にこんな所で寝ては風邪を引く。ヴィーダに毛布を掛け直して、ソファアーにて一息。

心配を掛けたようだ。恐らく夜遅くまで俺の帰りを待っていてくれたのだろう。本当は起きて待っていたかったのだろうが、限界を迎えてしまいそのままリビングで雑魚寝といった所だろう。

その優しさが今の俺には有り難かった。すぐ側で眠っているはやての髪を撫で微笑む。

「 ありがとう 」

伝わったのかどうかは分からないがはやては寝ていながらも優しい笑みを浮かべていた。

「 むにゃ……家族なんやから当然や 」

そんな寝言と共に。

『家族』

その言葉が深く心に響いた。今までの人生で家族としての存在はなかった。ナギ達は『仲間』、エヴァは『同類』。そしてマリアは『恋人』。一番近いのはマリアかも知れないが、それでも『家族』とは一線を隔す重み。普通なら当たり前の関係であっても俺にはいなかった。生を受けた瞬間から、俺には血族という存在がいなかったから。それが俺の一族であり、誇りでもあった。

それを知っているはずもないはやてが『家族』と呼んでくれる。所詮寝言なのかもしれない。

それでも彼女を護りたい。リインフォースとの約束という意味だけでなく、俺個人の意志として。だからこそ、赦さない。

再び、奥底に暗く炎が揺らめき立ち上る。

ざわざわと心を震えさせ、皮膚を粟立たせる。

君を護るためなら俺は悪を名乗ろう。あの日、あの時誓った言葉を俺はもう一度刻み付けた。

面会の許可が下りたのはそこから一週間後の事だった。思いの外あっさりと事が運んだと言うべきか。正確には面会の許可は早かった。ただ、クロノがグレアムに伝えるのを渋ったのだ。俺の異常な程の狂気に感づいたのか、それとも『闇の書』の被害者として会わせたく無かったのか。今となっては聞くべき事では無いだろう。けれど、クロノが面会のアポを取ろうとした際にグレアムは何かを悟ったような表情をしていたらしい。

あくまで非公式な面会なので立会人もいない。唯一クロノに殺すなど釘を刺されたぐらいだ。その対応自体は間違っていない。ク

口ノに落ち度があるとするなら、俺という存在を知らなすぎた事だろう。エヴァでもいいナギでもいい。俺を良く知る人間なら今回の面会の話が出た時点で許可しない。

簡単な話だ。

殺しはしない。ただ、壊す。生きている事を後悔させることすら生温い。産まれてしまったことを後悔してもらおう。

俺の本質は『悪』であり『魔』であり、そして『邪』だ。中庸であることは既に手放した。普通であることは放棄した。

総ての人間を護るつもりなど持ち合わせていない。自分の周りにいる一握りの大切なモノの為に悪になれる。ただ、それだけの話だ。だから俺は決して英雄などではない。あいつらの様に陽光の当たる場所にはいられない。

そんな強さなんて当の昔に棄てている。

「始めましてというべきだろうな、ギル・グレアム殿」

イギリスのとある田舎街。自然豊かなその街の丘の中腹に聳える一軒の屋敷。直射日光は木漏れ日となって降り注ぎ、軟らかな風が頬を撫でる。

軍人然とした容姿を予想していたが、少しかり予想は外れた。何処か温かみを感じる。そんな雰囲気的人物だった。その表情から伺えるのは充足感。

自分の役目は終えた　まさにそんな印象を受ける。

ふざけるな！！

詰め寄り殴り飛ばしたくなる衝動を抑え付け、ぐっと堪える。

「始めまして　そういえば何と呼べば宜しいかな？」

流暢な日本語。それが更にいらつきを助長させる。

「《終焉》フィナーレ」

「とも呼んでくれ」

お前に伝えるべき名など持つてはいない。お前にとって俺は鎌を振り下ろす死神でしか無いのだから……

「用件は一つ。」

お前を『断罪』しにきた」

そんな俺の言葉にそうかとだけ答え、家の中へと案内するグレアム。こうなることも覚悟の上だったのだろう。自分のやろうとした罪を受け入れていた。

無言の元、案内されたのは応接間と言えば良いのだろうか。重厚感溢れる木目調のテーブルにソファアが二つ相對する。奥にある窓から陽光が差し込み温かな光を点す。部屋の雰囲気からもギル・グレアムという男の人となりが分かる。

奥のソファアに腰掛けたグレアムに合わせて俺も手前へと座る。護衛の類は何もない。隣の部屋から気配を二つ感じるが、気になるレベルではなかった。

「恐らく私の事は聞いているだろう」

「」

そこから始まるのは懺悔だった。内容はクロノと同じ物。はやてを贄とした永久凍結

この男のやろうとした事は間違っていない。九を救うために一を捨てる。時空管理局としての立場としては至極正当だ。変な言い

方かもしれないが、そういう意味では評価出来なくはない。ただ許せないのは

『闇の書』を消す理由。

大切な人を失った事に対する復讐。正義を担う人間としてはあまりにも自己中心的だ。

そして何より

「お前の身の上話になど興味はない。訊きたい事はただ一つ

『何故未だにはやてに資金援助を行っている』
それだけだ」

グレアムは俺の言葉に顔を曇らせ、啞然としていた。何故そんなことを言われなくてはならないのか、その意味が理解できないらしい。

「何のためにはやてへの援助を続けている？ 贖罪か？ 惰性か？」

「はつきりと言ってしまえばお前のやっている事になど意味はない。贖罪というのなら、はやてに自らの罪を隠す理由が無い。惰性というのなら、そもそもするべき事ではない」

どんな結末になったとしても、自らの罪は消えない。にも関わらず、この男もそして管理局もそれを隠そうとしている。はやてに言うべき内容ではないのかもしれない。けれど、はやては傷を負った。リインフォースを失うことで生きながらえてしまった。犠牲がはやてからリインフォースへと変わったただけだ。

そこにどんな意味があるのか

「お前たちの望み通り『闇の書』は消滅した。そのかわり小さな子供に闇を植え付けた」

大義名分の問題ではない。結局のところ、はやては生きていない。自らは全く責任の無い過去の『闇の書』の罪を背負い、自分を助けようとした守護騎士たちの罪を背負い、傍から見ても解る。今のはやては余りにも危うい。生き急いでいる。死に場所を探していると言っても良い。

「贖罪というのなら　あの娘を救ってみせろ、ギル・グレアム！！はやてをあそこまで狂わせた罪はお前のものだろう」

怒気を孕んだ低い声色が大気を震わせる。

「父さま！！」

余りの怒気に苦しそうに胸を抑えるグレアム。呼吸も浅い。それを心配して隣室から慌てて駆け寄ろうとする少女二人を影で縛り上げ、喉元に鋭い槍先を突き付ける。非殺傷設定などない魔法だ。仮にバリアジャケットを展開されたとしても布切れ以下だ。

「は、はなせえっ！！」

もがく少女を無理矢理床へと縫い付ける。

「おいおい、か弱い少女は殺してもいいくせに、爺は殺してはいけないのか？」

「あの時はあれしか手が無かったんだ！！」

「手がない、か。良い言葉だな。ウンザリする……自分たちの行いが正しいとでも？なら、俺もはやてに傷を負わせた報いとしてお前らを殺すから許してくれ」

俺が右腕を振り下ろすと、影も呼応して少女の片割れを床へと叩き付ける。爆音と共に床は陥没し、少女は白目を剥いて昏倒してしまった。

「アリアー！！貴様アッ」

泣き叫びながらこちらを睨みつける少女に顔を歪めて嗤う。

「許してくれと言ったはずだが？

大切な者の敵として殺そうとしたお前たちと、俺と何が違う？何も変わらないだろう。

お前たちの罪が赦される事など決して有り得ない。それを忘れるな」

先程まで苦しそうにしていたグラムもそのまま床に倒れ込んでいた。

「どれだけ正当な理由があろうとお前たちは人を殺そうとした。殺す覚悟があつたのなら怨まれる覚悟ぐらいしておけ」

影を解除し、そのまま影へと身体を沈ませる。

もう二度と会うこともないだろう。

最後の刹那、瞳に映ったのはグラムを抱きしめ俺の方を睨みつける少女の姿だった。

死ぬまで罪に怯えて生きて逝け。

身体が沈み込む寸前、自らにも言い聞かせるようにそつと呟いた。

断罪の刃（後書き）

『断罪の刃』ということでしたが、“殺すという重み”それを一番理解しているのは主人公である遊馬です。非殺傷設定のある世界では人を殺す事がほとんどないはずで、だからこそ最小限の犠牲であれ命を軽んじたギル・グレアムが許せない。そんな話を書きたかったのですが……
いかんせん能力不足は否めない。

今回の話で番外編も一端終了し、いよいよ六課編へと突入します。

・次回予告・

それぞれの思惑を合わせ、機動六課は立ち上げられた。一年間の実験部隊。その宿舎の前に遊馬はやって来た。

「さて、妹は元気にやっているかな」

次回『機動六課始動』『終焉』の名のもとに『

ここで皆様にアンケートを！！もうすぐ五万アクセスいきそうなん
で新しく別の小説を書こうかと考えています。

主人公は神風遊馬のまま、別世界に飛ぶ感じですよ。で、その世界を
何処にするかアンケートをとってみたいので、ご協力をお願いします
す。

1、とある魔術（恋愛はなし・上条サイド）

2、ソウルイーター（死武専サイド・筆者は十五巻まで読破済み）

3、セキレイ（ハーレム？・八巻まで読破）

4、JINKI（ハーレムにはならない・多分メインはEXTEND
Dからのオリジナル展開？）

5、ロザリオとヴァンパイア（ハーレム？・若干うる覚え）

って感じです。

よろしくお願いします

機動六課始動〜『終焉』の名のもとに（前書き）

かなり時間が空いてしまいました……

機動六課始動『終焉』の名のもとに

「これで最後か……」

一人呟いて廃墟と化したとある施設を見遣る。元々は管理局の研究施設の一つ。正確には管理局上層部が所有する違法研究所だが

……

どれだけ正義を掲げようと、組織という箱庭は巨大になる程見えない部分が増えてくる。ずっと前から理解している事だったが、ここまで露骨だと怒りを通り越して呆れがくる。

「『リンカーコア移植計画』……か」

この世界での魔導師の体内に存在する特殊な器官『リンカーコア』。魔力を生成する機能を有し、これが魔導師の核となる。逆に言うてしまえば『リンカーコア』がなければ魔導師にはなれない。しかも『リンカーコア』の性能も千差万別。総ての魔導師がはやて達のような存在ではない。ある者は負傷によって管理局から去り、ある者は雑兵として使い潰され命を散らす。

それが魔法第一主義の管理局では当たり前の光景だ。力があればそれだけ上にいける。実力主義なのかもしれないが、それが一つの弊害を生んでしまった。

人材不足。正確には人を育てなくなったのだ。弱い者を育て上げるより、最初から才能のある人物を集めた方が早い。

そういつた思考の最果てに『リンカーコア移植計画』が存在する。第一線を退いた有能な人間のリンカーコアを第三者に移植する。そうすれば、新たな有能な人材が造りだせる。

しかし『リンカーコア』は特別ではあるが臓器の一種だ。それを

赤の他人に移すとなれば、当然ながら拒絶反応が起きる。

当然ながら計画は頓挫した。しかし、それでも実験は続けられた。死亡者は三百人以上、成功した例はない。繰り返される狂気は更にどす黒い思考へと移行する。最終的な『リンカーコア移植計画』は『身体能力の優れた人間を造りだし、リンカーコアを移植する』に変質した。遺伝子操作やクローン技術によって生み出した優秀な個体にリンカーコアを移植する。

あらゆる意味で矛盾した計画は今まで続けられていた。

「腐っているな」

本来ならばこんな施設を発見したとしても無視する。けれど、そうも言っていられなかった。理由は二つ。

一つは成果。

そしてもう一つはこの実験に『闇の書』が関わっていたことだ。リンカーコアを抜き取る技術として『闇の書』の蒐集が応用されていた。

今もなお『闇の書』の呪縛ははやてやノアを苦しめている、己が知らない所で。

「主遊馬、そろそろ出発しなければ始動初日に間に合いません」

「わかった。そろそろ妹たちの顔を見に行こうか」

彼女達と別れてから約四年。成長したであろう彼女達の姿を想像して思わず笑みがこぼれた。

「行く前に奴に連絡とらないとな」

端末を操作しとある人物へと通信を繋げる。

「行くのかね」

病的なほど白い肌。日に当たっていないからか、顔色も悪く見える。そんな男がモニターに映る。

「ああ。とりあえず今日からはやての部隊が始動するからな……俺としては手伝わないといけない」

「ククッ、君は相変わらず優しいなあ。まあいい、私たちもそろそろ動く。お互い楽しもうじゃないか」

その瞳に浮かぶのは純粹なまでの探究心、そして狂気。そんな男はひとしきり嗤い満足したのか、思い出したように口を開いた。

「そういえば娘たちが君に会いたがっていたよ」

「そうか」

そのうち会いに行くでしょう。俺の将来の目的には彼女達の力が必要だから。

「しばらく経ったらまた連絡する」

お互いに必要最低限の会話で済ませた。今後の事を考えるとこれで十分だ。

「爺たちは？」

「先程通信で『準備は済んだ』そうです」

そうでなければ困る。下準備に約一年　　今までの苦勞というのは報われなければ意味がない。

「では行こうか……ミッドチルダに」

「座標軸設定完了。目標ミッドチルダ機動六課宿舎前」

新たな日々が始まる。

けれど、特別な想いなど有りはしない。俺は俺の出来ることをする。そのためならこの身を泥に埋めようとも構わない。既に人を捨てた身だ。感慨も後悔もない。せめて、俺がこの世界にいた証を遺す。

「独立部隊『デッドエンド終焉』隊長・八神遊馬参る」

転移先に到着すると目の前には広大な敷地を誇る機動六課。建物自体は新築とはいかないものの設備は最新鋭だとクロノが言っていたのを思い出した。道路の端には街路樹が並び、自然との調和が感じられた。

「ふむ、既に集まっているか」

宿舎のロビーにメンバーが集まっているのが見えた。ちょうどはやてが始動の挨拶をしているところらしい。一段高い所に立ち、バツクヤードを含めた面々に声を掛けている。さすがにここからは声

を聞き取ることは出来ないが、誇らしげに胸を張るはやての姿は大人びて見えた。

「はやても成長しましたね」

俺の思考を読んだのか、隣にいたノアが声を掛けてきた。

「四年の月日は人をここまで成長させるらしい」

時から隔離された俺としてはそれが羨ましくも思える。

「それでも主は彼女達を護るつもりなのでしょう？」

「勘違いするな。」

俺には俺の目的がある。ただそれだけの事だ」

素っ気なく答えると、ノアはクスリと笑んだ。

どうも居心地が悪い。それなりの時を共に過ごしたからか、最近
はノアも俺に容赦がない。

「行くぞ」

未だに笑顔のノアを横目で睨んで足早に玄関へと向かう。そんな
俺を見てノアは一度だけ声を出して笑い、俺の隣へと駆け寄る。

「これが最後だ。」

着いて来れるか『ソウルノア』

「我が身、我が心は主『神風遊馬』の御傍に」

ならば共に行くでしょう。決して誇れる生き方はしていない。けれど、芯は変えない。揺るぎない狂気をもって敵を薙ぎ払う。

お互いに決意を確認し、更に歩みを進めていく。
すると少しずつだがはやての声が拾えるようになってきた。

「ここには最新鋭の設備、優秀なバックヤードスタッフ、そして有望なフォワード陣もいます。

皆が力を合わせればどんな困難にも立ち向かえると信じています。どうか力を貸してください」

盛大な拍手に迎えられ、はやては右腕を掲げて応える。そして、拍手が収まるのを待つて更に言葉を続けた。

「まだ到着していませんが、私にとって大切な人が来てくれると信じています。

その人は捻くれ者で説教臭くて
けれど強くて優しい人です。そして私達を導いてくれた大きな人です」

明らかに俺の事だろう。はやての傍にいるいつものメンバーも何度も頷いている。

「愛されてますね」

「勘弁してくれ。これ以上は恥ずかしくて死ねる」

とりあえず、はやてのふざけた演説を止めることから始めよう。
ヤクザの事務所に殴り込むような勢いでロビーに突入する。突然の事に慌てる者、俺の姿を見て驚く者いろいろだが、それを無視して一直線にはやての目の前に進み脳天に軽めの拳を叩き込む。

「お前馬鹿だろ。いくらなんでも恥ずかしすぎるぞ」

「つう……久々に会った妹にこの仕打ちは酷いんちゃう!？」

頭を押さえ涙目で俺を睨むはやて。

「それでも優しい方だ」

そこで漸く辺りの静けさに気付いた。まあ、突然現れた男に殴れた上に説教を喰らっているわけだから理解できなくはない。

苦し紛れに一度咳ばらい。

「先程ここにいる頭の可哀相なガキの兄だ。まあ、自己紹介やら再会の挨拶なんかは後でやる。

高町なのは、とりあえずこれからの予定を教えろ」

「えっと……今から新人たちを連れて機動六課の隊舎の案内で、そのあとに軽めの訓練を行う予定です」

「ガキどもは任せる。後で俺も見に行こう。
今はこいつの説教が先だ」

はやての制服の襟を掴む。成す術なく引きずられるはやての姿はどこか哀愁を感じさせたとか……

そこから機動六課の部隊長室での説教は約半刻続いた。まあ、細かいことは言わないでおこう。そこにいたのはボロ雑巾と化したは

やての姿とそれを見下ろす俺、そして俺達の様子を楽しげに眺める
ノアだけだ。

「それにしても……よう来れたなあ。機動六課の設立とかは機密事項
頂やったから来んかと思つとつたわ」

何とか復活したはやては意外そうに呟いた。

「俺達も色んな次元世界渡り歩いていたんだが、クロノの坊主に偶然
再会してな」

その時の事を思い出すと自然と笑みが零れた。休暇を夫婦で過ご
していたらしい。俺達の姿に気付いた時は驚きの余りに叫んでしま
ったぐらいだ。

「その時にお前が部隊を設立しようとしているという話を聞いた。
驚いたぞ？お前が最初に出した主要隊員のリストの中に始めから俺
達の名があつたんだからな。管理局員でもない男をメンバーに入れ
たせいでかなり批判されたらしいしな」

「けど遊馬兄イは来てくれたやんか」

「まあ、それなりに苦労したがな……」

溜息混じりに言葉を漏らす。

「まあ、再会の馴れ合いもここまでだ」

そこで一度言葉を切り、右腕を振り上げ手の平を額の前に置く。
所謂、敬礼という奴だ。俺の意図を理解してノアも合わせて敬礼を

する。

「管理局独立部隊『終焉』^{デッドエンド} 部隊長、八神遊馬。本日付けで機動六課へ出向する」

「同じく『終焉』所属、ソウルノアです」

「ようこそ……って『終焉』！？しかも部隊長やてッ
どういうことや!？」

一瞬流そうとしたが俺達の言葉に目を丸くして声を荒げるはやて。

驚くのも無理はない。管理局が嫌いだと明言していた俺が管理局に所属し、その上部隊長をしているのだから。俺自身かなり妥協した結果の上だったりする。本来なら囑託魔導師もしくは外部協力者扱いでいようと考えていたのだが上からストップが掛かった。ただでさえ一年間のみの実験部隊。これ以上の問題を上げさせる訳にもいかなかったらしい。

「結果的に今の俺達は三提督直属の局員だ。あくまで非公式だから階級はないがな」

簡単にではあるがはやてに説明をしておいた。とは言え『伝説の三提督』まで出てくればかなりの重要機密だと理解できたらしい。おちゃらけた雰囲気は霧散し張り詰めた緊張感が漂う。

「あくまでここにいる俺は囑託魔導師扱いだ。だから今の話は他言無用だ」

「なのはちゃんたちにも言うたらアカンの?」

「仲間外れの感もあるが言わないでかけ」

せめて身内だけでもと考えていたはやてにそう忠告しておいた。

「とりあえず俺達から話しておかなければならない話は以上だ」

「分かった。他にも訊きたい事はあるけどいいわ。今は遊馬兄イに再会できたことだけで満足しとく」

俺の言葉にはやては頷く。まあ、明らかに納得しきれていないようだが、それでもこれ以上尋ねないのはかなりの機密であることを理解できたからだろう。ある意味では大人の対応が出来るようになったはやてに賞賛を与えたいところだ。

「それじゃあ俺はガキどもの訓練を見に行くぞ」

そう言って部屋を出た。そのままの足で訓練施設へと向かっているが、辺りがかなり忙しく動いている。始動初日なのだから当然か。

《 全てを伝えなくて良かったのですか？ 》

不意にそんな言葉が届いた。

《……》

俺は応えない。

知らなくても良いことは存在する。独立部隊『終焉』の目的は管理局内部の腐った上層部の粛正。

簡潔に言ってしまうえば、未だに元『闇の書』の主として一部の上層部に犯罪者扱いされているはやてを餌に不正を働いている連中を炙り出す。

《どれだけ主が修羅を歩もうと私と彼は主の味方です》

《 ありがとう 》

街路樹に日光は遮られ、心地好い春風が俺の頬をそつと撫でていった。

機動六課始動〜『終焉』の名のもとに（後書き）

正直スランプです。情景は出て来るのに文字に仕切れない自分の技量が恥ずかしい

前回のあとがきに書かせてもらったアンケートですがもう少し募集を続けます。書かれていない作品でも希望があれば御自由をお願いします。

今のところ『とある魔術』でいこうとは考えていますが……

地の底にて陽光を見上げる・前（前書き）

ホントに久々ですがようやくリアルが落ち着きました。

まあ細かい事は抜きにして……これからは週一回更新を目標に頑張ります。

地の底にて陽光を見上げる・前

「案外遠い場所にあるんだな……」

機動六課隊舎から出たものの、そこから訓練施設まで数分の時間が掛かった。

「確か高町なのは監修のシミュレーション装置を利用したもので、そのためそれなりのスペースが必要なのだとか」

話を聞く限り、かなり高性能なものらしい。訓練用的だけでなく、訓練のステージを廃墟や森等に変化させることも出来る。デバイスといいこういった技術のレベルは非常に驚かされるものだ。

ただ、こういった技術は管理局の管理する世界の応用だ。

この世界の根底には、数多に存在する次元世界の多様性が存在する。科学が異様に発達した世界、魔法が存在する世界、更には龍種などの魔法生命体のいる世界。そういったモノを一つに纏め上げたのは管理局の功績の一つだろう。

「結局のところ旨い汁を吸るのは管理局だけって事だな」

こういった技術は世間には広まらない。特にデバイスを元にした技術は。実際、一般市民にもデバイス所持は認められている。あくまで自衛の手段としてだ。だから、そこまでの高性能さはない。他世界と管理局の地上本部のあるミッドチルダとの科学技術の差は約十年、更にミッドチルダと地上本部との差は五年と言われている。この差は深い溝となって現実として横たわっている。発展途上といえは聞こえは良いが、結局のところ技術の独占でしかない。

「さて、ガキどもの動きはどうだろうな」

埋没しかけた思考を無理矢理中断して浮上させる。気付けば既に訓練施設までやって来ていたからだ。廃墟をモチーフにしたステージ内をガキどもの魔力反応が駆け巡っている。

「とりあえず、なのはと合流するか……」

東に約百メートル離れた地点から高町なのはと別の人間の気配がする。ガキどもとも違ふところを考えると見学者もしくはデバイス技師なのだろう。

のんびり歩いても良かったが、訓練を邪魔する訳にもいかないので転移する。

「どうだ？ガキどもはよ」

転移でなのはの背後にまわり声を掛けると驚いたのか普段見せない形容しがたい表情でコチラにガバツと向き直る。

「遊馬さん！！驚かさないでよぉ」

現れたのが俺であることに気付き安堵の息を漏らすなのは。対してもう一人の方は少しばかり緊張が残っていた。表情もどこかぎこちない。初対面なのだからそれも仕方ないだろう。

「嬢ちゃんとは始めましてか。俺は八神遊馬、ここの部隊長の兄で今日から世話になる。で隣にいるのが相棒の『ソウルノア』だ」

「主のデバイス『ソウルノア』と言います。以後お見知りおきを

「

まあ、そのうち慣れるだろう。そう結論づけて前方で戦闘を行っている新人達の方に視線を向ける。

「ウインググロードッ!!」

そんな叫びとも聞こえる言葉と共に目の前を青い帯状の魔法陣が駆け抜ける。更にその上をローラー付きのブーツを履いた少女が猛スピードで滑走して行った。

「珍しい魔法だな……飛行魔法ではないし、滑走魔法といったところか？」

「『ウインググロード』っていう移動魔法ですね。あまり使う人はいませんが障害物を気にしないで走れるのは利点ですね」

俺の言葉を補足してなのは隣の少女は口を開く。先程のぎこちなさは無くなり真剣な表情で新人達の動きを見ながらコンソールを叩いていた。モニターにはそれぞれのデバイスの働きと動きの適合性を示すグラフが数値化されている。おそらく彼女はデバイス技師なのだろう。

「そういえば嬢ちゃんの名を聞いてなかったな」

「そうでしたッ!!私は機動六課ロングアーチ所属シャリオ・フィニーノ一等陸士です。通信士及びデバイス技師です。シャリーって呼んで下さい」

慌てた様子で名乗る少女　シャーリー。丸みを帯びた眼鏡も相まってのんびりとした印象を受ける。

「とりあえず後で気になったことは伝えるからデバイス製作のヒントにでもしてくれ」

今の時点で気になるのは『ウイングロード』の単純さ。ただ標的に向かって追いかけるだけになってしまっている。ダミー路線やその他のいろいろなパターンをいれていかなければ効果的な動きは出来ない。足の方に装備されたローラーを見ると明らかに手作り感満載。デバイスと呼ぶには余りにも杜撰だ　と、考えれば『ウイングロード』のルート作成は彼女自身で行っているのだろう。ただ、訓練の様子を見るに彼女はそういった細かい作業に向いていない。直感型と言えば聞こえは良いが、今のままでは単なる猪ではない。足のローラーをきちんとしたデバイスにして自己判断で『ウイングロード』を展開出来るようにするべきだろう。

「確か　あの手のロボットにはAMF付いてたな。ガキどもには荷が重いんじゃないか？」

訓練の相手として用意されたのは『ガジェットドローン』と呼ばれる自律型の機械兵器だ。今、訓練施設内を駆け回っているのは？型と呼ばれるタイプ。射撃性能もさることながら、一番の特徴として挙げられるのが『AMF』と呼ばれる魔法障壁だ。自らを中心に魔法を弱めるフィールドを作り出す。あくまで『打ち消す』ではなく『弱める』なので対処法はいくらでもあるが、ガジェットとの初戦闘である彼らにとっては苦戦することは容易に判断できる。いまもオレンジ髪の少女の射撃魔法が打ち消され全く意味を成さなかった。

「遊馬さんはガジェットと戦ったことあるの？」

俺の言葉にそんな疑問を返してくるなのは。

「まあ、ああいう新型兵器の実験に無人世界が使われることが多くてな……何度か戦闘したことはあるな」

「ちなみに遊馬さんはガジェットの対処はどうするの？」

「ん？変に魔法使うから消されるんだから、純粋な物理ダメージで叩き斬るかな。まあ、ベル力式だから出来ることだがな……」

ガジェットを魔法ダメージだけで倒すのは意外と困難だったりする。今の魔術師の多くはミッド式。ミッド式の特徴はロングレンジからの強力な砲撃魔法で敵を討つ。極端な言い方をすれば固定砲台だ。そのため物理ダメージよりも魔力ダメージに重きを置く傾向がある。しかしAMFの影響下ではそれも半減する。一定の威力では効果はない。そのためある程度の工夫が必要になってくる訳だ。

一方、ベル力式は近接格闘に特化し魔法を補助として使うことが多い。確かにAMFは魔力ダメージを半減させるが物理ダメージに関しては意味がない。ガジェット本体の装甲で耐えるしかないのだ。とはいえ、ガジェットの装甲もそれなりに厚い。ベル力式の近接格闘であっても元は武術だ。ある程度の練度が必要になってくる。

「未熟な奴が俺と同じ事をやろうとすると　ああなる」

俺が指し示した先では先程ウイングロードを疾走していた少女の右拳がガジェットの装甲に傷一つ付けずに阻まれていた。しかも彼女が足場になっているものも、魔力で出来たモノだ。ならば当然

「うわッ！？わったた　　！！」

『AMF』に打ち消される。足場が急激に失われ慌てて退避して難を逃れたものの、それぐらいの判断力は欲しい。

「ガジェットは魔力が打ち消される『AMF』があるからね。近付きすぎると移動系の魔法も消されちゃうから気をつけて。対処法はいろいろあるから考えてみよう」

新人が『AMF』の存在に気付いたタイミングで、なのはが音声にて伝える。ただ、ヒントは出しても答えは言わない。自分なりに考える。これもまた実力として身につくからだ。

「まあ極論としては魔力を一切使わないか、消されないだけの魔力を込めるかの二択だな」

「極論というか……暴論な感じがしますね」

俺の言葉にシャーリーが苦笑いを浮かべるが事実は事実だ。クロスレンジなら前者、ロングレンジなら後者といったところだ。

「お手並み拝見といこうか　　」

今現在の實力をしるためにもそれ以上の言葉を無くし、静かにモニターと実際の動きに目をやった。

モニターでは二人の少女が会話している場面が映し出されていた。一人はオレンジ髪を左右で結んだ少女　名前はティアナ・ランスターと言らしい。もう一人はピンク色の髪をした幼い顔立ちをした少女、キャロ・ル・ルシエ。ティアナ・ランスターは銃型のデバイスを構え周囲を警戒しながらキャロ・ル・ルシエに話しかけていた。

「チビツ子、何か手はある？」

「やりたい事が何個か……」

その言葉にティアナは満足そうに頷き、ニヤリと笑んだ。

「上出来っ」

そう言って念話を飛ばす。

<スバルッ！！敵を引き付けて>

<了解！！>

念話を受けたスバルはウイングロードならではの機動性でビル群の隙間を縦横無尽に疾走していく。

モニターは移り変わって新人唯一の男であるエリオ・モンディア

ル。燃えるような赤髪に槍を携えた少年だった。エリオは槍の鍔後部についた二つのブースターの推進力を利用してガジェットからの射撃を躲していく。

スバルやエリオの動きは確かに新人としては素晴らしいモノだ。けれど余りにも無駄が多い。一つ一つの動きが拙い。特にエリオは槍の扱い方に慣れていない印象を受ける。またスバルはミッド独特のシューティングアーツと呼ばれる格闘技を習っているらしく動きはそれなりの練度がある。ただ、このシューティングアーツと呼ばれるモノはかなりの欠陥が存在する。元々、ミッドは魔法至上主義であるため格闘技は軽視されがちだ。つまり研鑽が浅い。そのため、格闘技として幼稚過ぎる。『拳で殴る』一つとっても地球に存在するあらゆる格闘技に比べても雲泥の差が存在する。今後発展を遂げる可能性は確かにあるが、その可能性は低いだろう。

「まあ、その辺りは俺が何とかするか」

モニター越しに二人の動きを見ながら呟く。

「なのは、午後からどういった訓練をするつもりだ？」

「一応、個別練習は今はいらないで基礎訓練を徹底するつもりだけど……どうかした？」

なのはの予定は妥当なものだった。殆ど身体が出来上がっていない今のうちにキチンと基礎を作り上げるつもりのようなのだ。特に問題もないだろう。なら、少しばかり時間を貰えば良い。

「これが終わった後、少し時間が貰えるか？俺達の自己紹介と少しアドバイスをしたいしな」

「わかったの。もう少ししたら終わりそうだから　っ!？」

刹那、辺りに轟音が響き渡った。見ればエリオがビルの壁を破壊し、崩れ落ちる壁面の破片でガジェットを巻き添えに捕縛しているところだった。

「おい、あれは　アリか？」

あまりの事に呆然としてしまった。危険過ぎる。

「アハハ、一般人がいないのが確実ならオツケーかな」

苦笑しながらもそんなふざけた事を言っただけなのはを思わず睨みつけた。

「お前達が『正義』を掲げるなら　今の行動は決して認めるな」
短くそう紡ぐ。

今のなのはなら理解してくれると信じて

そんな俺達の様子など気付いた様子もなく新人達はどんどん行動していく。

とは言えこの場の空気は張り詰めていた。俺自身こんなものかという落胆すらある。俺があの日伝えたかったモノはこんなものか、と。『正義』というモノの重みを、『護る』という難しさを彼女達は知っていなければならない。

虚しい

怒りはない。けれど、彼女達が道を過つなら正すのは俺の役目だ、修羅に堕ちた俺の。

「そ、そろそろ終わりますよ」

今の空気を何とかしようとシャーリーが明るく努める。俺も気を切り替えるが、なのは未だに落ち込んだままだ。

「今は新人共に集中しろ。俺の言った言葉の意味は理解できているだろう。ガキ共に総てを伝えるのはお前の仕事だ」

「ゴメンなの。私、大切なことを忘れてたみたい」

そう言つて真剣な目でモニターを見つめる。その目は十年前、俺と対峙した時と同じ真っ直ぐな視線だ。

「良い眼だ」

なのはの頭をポンと撫でる。一瞬驚いた様な顔をしたが気持ち良さそうに目を細めた。

一方、新人達の動きに視線を戻す。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。鍊鉄召喚、アルケミックチェーン――」

両腕を胸元に交差し、詠唱すると箆手型のデバイスに魔力が籠る。更に地面に魔法陣が浮かび上がり、そこから四本の鎖が現れガジェットを縛り上げていく。

「無機物の召喚か　中々面白いことをする」

「器用なの」

召喚魔法は一族に受け継がれる事が多い。そういう意味では余りお目にかかる機会は少ない。

彼女の召喚技術は高いだろう。しかし自信の無さが実力を下げている印象を受ける。現に近くを飛んでいる小さな龍　前足と翼が一体となったワイバーン種　は所謂、幼生体という奴だ。実力があるにも関わらず本来の姿に出来ていない。恐らく暴走の可能性があるからだろう。今はそれで良いかもしれない。けれど今後の事を考えると今のままではいられない。明らかに後衛しかもサポートに特化しているキャラは攻撃力に難がある。そのためにも龍本来の力を制御出来ねばならない。そのあたりは今後の練習次第か……

そしてティアナはというと必死に魔力球を制御している場面だった。確かに射撃魔法でガジェットで倒すのは難しい。一番の理由は魔力を込めるのが難しい事だ。砲撃は魔力を込めればそれだけ威力がアップする。しかし射撃ではそれが難しい。何故なら魔力球という形に収束しなければならいからだ。だから一定以上の魔力を込めることは困難を窮める。

だからティアナが行ったのは『魔力球を更に魔力で包む』事だった。殻で魔力球を包み、本体をAMFで消されない様になっている。

「あの魔法はAAクラスの魔法なの」
「なのも驚いているようだ。」

「あれは魔力制御が拙すぎるな。収束を早めないと実戦では使えな

い」

制御が甘いため、魔力球を包むのに時間がかかり過ぎていた。

まあ、全体の動きとしては合格だろう。それぞれ幾つか気になる点は後でシャーリーに伝えておく事にしよう。

「　　ヴァリアブルシュート!!」

ティアナの作った魔力球は虚空を疾駆し突き進む。AMFで一瞬拮抗したが内側の射撃魔法はしっかりとAMFを貫きガジェットの本体を爆砕した。

「これでガジェットは全機撃破もしくは捕縛完了か」

見れば瓦礫に埋もれたガジェットを含め全てが破壊もしくは捕縛されていた。その様子を確認したなのは満足したように頷くと通信で伝える。

「はい、じゃあ今回の訓練はこれで終わり。みんな集合しようか」

その言葉に安心したのか集まった瞬間に力無く地面にへたりこんだ。全員の最優先の課題は体力の向上か。それに関してもなのは把握しているだろうが……

「それじゃあ遊馬さんに自己紹介してもらおうかな」

「さてガキ共 今日からお前らの『体術教導官』を担当する八神遊馬だ」

なのはの言葉に四人共焦ったように立ち上がり敬礼してくるが、右手で制して辞めさせる。

「一応、俺は囑託魔導師扱いだ。別にお前らの上司ではない。敬礼などは無用だ」

少し怯え気味に震える彼等の瞳には俺がどう映っているのだろうか。

< 始まりますね、主 >

< ああ、俺はこの世界を一度作り替える >

機動六課での『終焉』が今、始まる。

地の底にて陽光を見上げる・前（後書き）

P S P が完全に逝ってしまった……

ご冥福をお祈りします

地の底にて陽光を見上げる・後（前書き）

週一更新と言っておきながら、一ヶ月も更新が遅れて申し訳ありません。

地の底にて陽光を見上げる・後

「さて、悪いが自己紹介を頼む」

モニター越しに名前を確認しているが、一応のお決まりという訳で自己紹介をさせているのだが四人に共通して見えるのは『怯え』の色だ。考えてみれば当たり前だ。俺という存在はこいつらにしてみれば初見の相手、しかもそれが自分達のトップである八神はやてに説教をかましたのだから。

正体不明。

「ティアナ・ランスター二等陸士であります」

「スバル・ナカジマ二等陸士であります」

「エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「キ、キャロル・ルシエ三等陸士であります」

一名緊張で固まっているが、それでも律儀に返事してくれたのは恐怖故か、それとも隣でニコニコしている高町なのはへの信賴の証か。

「いろいろと訊きたいこともあるだろう。何か質問はないか？」

俺の問いに一時の沈黙。けれど直ぐさま年長二人の右手が遠慮がちに上がる。

「ではランスターから」

「二点ほど質問があります。

八神さんの魔導師ランク及び使用する魔導式を
それと隊長方との関係をお聞きしたいのですが」

真つすぐこちらを射抜く瞳。

なかなか頭の良い子だ

すっかり自分の中での疑問を整理できている。更に魔導師ランク等の戦力確認。自分の周りにいる人間の実力を把握しようとする意識も評価できる。

それが第一印象だった。周りを客観視でき状況把握に勤めようとする。訓練の様子からも感じたが、典型的なリーダータイプだろう。

「魔導師ランクに関してはここ数年調べていないが……十年前に調べた際にはSSだったか。魔導式は基本は古代ベルカ式を使用して。ただ、いろいろと術式に改良を重ねた結果、ベルカ式とも違ったモノに成ったが……名を付けるなら魔法式^{マジキ}といったところだな。

それから紹介が遅れたが俺の相棒である『デュアルデバイス』のソウルノアだ」

「ソウルノアです。ノアと呼び下さい」

音もなく現れたソウルノアに驚きに目を見開く面々

漆黒の髪に褐色の肌。以前より拘束度をました拘束具によってノアの両腕を雁字搦めに縛られていた。首輪の先に施されていた十字架は無くなり無機質な鎖のみが地面へと垂れ下がり、身じろぎ一つでジャリと金属音を響かせる。

そんな彼女の姿は確かに恐ろしいモノに映るだろう。

俺の過去を知り、その上で俺と共に生きることを誓ったノアの姿は自らの罪に縛られた咎人のように見えた。

「……デュアルデバイス、ですか？」

確かに聞いたことの無い名称だろう。ノアの姿に啞然としながらも尋ねてきた。

「まあ、聞いたことの無い名だろうな……」

ユニゾンデバイスの特殊なモノだと思ってくれば良い」

ユニゾンデバイスとは何か。

端的な言い方をしてしまえば『補助用』デバイスだ。自律して魔法を使えることも利点ではあるが、ユニゾンデバイスの本質は使用者の実力を底上げすることにある。魔力お呼び演算能力の向上。しかしながら、それ単体での能力はあまり高くない。更にユニゾンデバイスのみだと魔法行使が出来ない等の欠点がある。つまり複数個デバイスを所持していなければならないのだ。実際リインフォース？の主であるはやてもアームドデバイス『騎士杖シュベルトクロイツ』を所持し、それを統合する形でリインフォース？がある。

それに対して『ソウルノア』はユニゾンデバイスであると同時にインテリジェントデバイスでもあるという特徴がある。つまり、それぞれが別個に戦えると同時にユニゾンして戦うことが可能なのだ。そういう意味あの男はノアを『デュアル（二重）』と名付けた。

とは言え、当然欠点も存在する。

まず主である俺以外とのユニゾンが出来ない。これに関しては『

ソウルノア』の性質上仕方無いことだ。インテリジェントデバイスは主の設定を決めてしまうと、それ以外の人間では魔法行使を不可能に設定してしまうからだ。

更にノア自身が魔力の生成出来ない。魔力自体は持てるがあくまで俺の魔力を貯めておく巨大なカートリッジと変わらない。使い切ってしまうと、再度貯める必要がある。俺自身の魔力は破格ではあるが、封印を施し、更に爺達からリミッターを掛けられているせいで直ぐにノアに魔力を供給するのは難しい。まあ、これに関しては裏技があるが……

「それから……はやて達との関係だが俺は名でも分かると思うが、八神はやての義兄だ。そういうこともあって機動六課に所属する中心的な連中とは大体顔なじみだ。

納得はあったか？」

「把握しました。ありがとうございます」

納得したのかパツと手を下げる。周りの連中も成る程と頷いていた。唯一、『デュアルデバイス』という言葉聞いて興味を抱いたのか好奇の視線を俺の中指に輝く『ソウルノア』の核と顕現しているノアを何度も動かしていた。

「さて、次はナカジマ」

「さっき八神さんが言っていた“体術教導官”って何ですか？」

「なのは達が教えられるのは主に基礎的なモノだ。例えばチームと

しての動き、魔力運用それから魔法技術の訓練等が中心だ。

それに対して俺が教えるのは“体術”全般だ。武器の扱い方や武術　そういった魔法外での訓練が俺の担当だと思ってくれば良い。ナカジマが使っているシューティングアーツなんかを教えると考えておけ」

あまり理解力がなさそうだったので、これ以上の説明は止めておこうと思ったが、再びティアナが口を開いた。

「　　ということは私や、フルバックのちびっ子は関係ないということですか？」

本当に頭が良い。これは素直に答えておこうか。

「そういう事ではないな……ランスターの場合を例にするが、敵と戦闘する際に接近させないような立ち回りを教えるのがなのはなのに対して接近された場合の対処法を教えるのが俺の役目だな」

今のところ、先程までの訓練の様子を見る限りで組み立てた鍛練計画はそれぞれにある。

スバルに関しては無手での格闘技の練度を上げる。一撃での突貫力は目を見張るものがあるが、体術そのものに関してはあまりにも稚拙だ。ただ、本人の態度を考えるにちまちました攻防は苦手だろう。一撃必殺に拘るのであればそれに特化した体捌きが必要になってくるだろう。

ティアナに関しては現状で教えられることは余り無い。基本的に射撃・砲撃魔法の使い手は、近接戦闘をしないからだ。正確には近接“させない”為にどうするのかに重きを置いている。銃を使った

近接格闘 所謂『銃型』というものは存在するが、基本である遠距離からの狙撃が完璧にこなせなければ意味が無い。何より応用に固執し基礎中の基礎である魔力制御が甘い所を考えるに、基礎の徹底を図るべきだろう。

エリオについては槍の扱いを基礎から叩き込む。戦闘に慣れていない今の段階では実践的な内容を教え込んだところで仕方が無い。身体が出来ていない今はとにかく槍の扱いに慣れさせ、槍使いとしての肉体を作っていく必要がある。

キヤロはあまりにも攻め手が少ない。召喚魔法やブースト等、かなりの手段は持ち合わせているようだが攻撃に関しては他人頼み。一応、龍召喚は出来るようだが制御が出来ないため力を抑えている。これに関しては専門外なので対処のしようが無いのが現実だ。エリオと同様にまずは身体作りに集中するべきだろう。合気道やエヴァのやっていた弦による捌手なんかも教えてみるのも面白いかもしれない。

……まあ、あくまで俺はなのはの補佐だ。俺も『終焉』としての仕事がある以上、コイツらに付きっ切りという訳にはいかない。今のなのはの様子を観れば問題無いはずだ。きっと新人達を正しい道へと導いてくれるだろう。

「他に質問はないな。なら……」

昼飯にしようか。そう言おうかとしたところ、目の前の視界を一瞬遮られた。何事かと構えるが、キヤロの相棒たる小さなワイバーンが俺の目の前を目まぐるしく旋回しだした。

「フ、フリード!？」

慌てて止めようとするキャロを右手で制して、左腕を前に差し出すとワイバーンは腕に降り立った。そこから数瞬　沈黙が流れる。見定める様に俺の瞳を見つめていたワイバーンだったが、感じるモノがあつたのか頭を垂らした。

「小さき龍よ　名は？」

「キユクル」

「そうかフリードリヒと言うのか　良い名だ。」

右手で頭を撫でると気持ち良さそうに目を細め、もっと撫でるとばかりにはためかせる。

「フリードの言ってることが分かりますか！？」

驚きに目を丸くするキャロだったが、それが逆に俺にとっては驚きだった。思わず苦笑が漏れる。

「完全に理解することは出来ないが……大体ならば可能だな」

あまり知られていない事だが、龍という種族には『言語』が存在しない。なぜなら種としてそれぞれが個として生きるからだ。同じ種族であってもそれぞれが独立して生きる。他者との繋がりを極限まで排し、個で生きる。呪いと言って過言ではないほど孤高。

だからこそ、格の上下関係に厳しい生き物でもある。長く生きた者を敬う精神。知を求める高潔さ。力を持つ者に対する賛辞。正しく龍という種族は清い。長く生きた龍は人語を用いるのはある意味では矜持に寄るものでもある。

「龍という存在をキチンと理解しろ。

召喚士はあくまで喚ぶ者だ

制御する力だけでは想いは届かない。

必要なのは、『共に在ろう』という意志だ」

フリードリヒの乗る左腕を軽く振るうと、フリードリヒは名残惜しげに飛び発ちキャロの頭の上をくるりと一回転してキャロの腕の中に収まった。

「とりあえず午前の練習はこれでおしまい

隊舎に戻って昼食の後、一時間後に練習を再開するからね」

会話が一段落した後、なのはが今後の予定を伝えたと四人は元氣良く返事をする。

これからの事に意気込む四人の姿は輝く星のように眩しく映る。

俺という存在が彼らにとって正しく導く光となるか否か

俺は俺の全力を尽くそう。輝く未来を血で汚す訳にはいかないのだから……

地の底にて陽光を見上げる・後（後書き）

深夜のコンビニでバイトを始めました。一ヶ月経ちましたが完全に
昼夜逆転……

唯一、廃棄の弁当が食えるのは有り難い。

・次回予告・

新たな日常が始まる。

厳しい訓練を必死にこなすフォワード陣。

そんな時、四人は遊馬の実力を目の当たりにする。

彼らの目に遊馬の姿はどのように映るのだろうか……

次回『焰燃ゆる』

暖かな光（前書き）

かなり短いです。幕間のようなモンだと思って下さい。

暖かな光

あれから新人達は疲れた身体を引きずりながらも隊舎へと帰っていった。俺も昼食の為に帰ろうかと考えていた所でシャーリーから声を掛けられた。

「八神さん!!」

「どうかしたか？」

「デバイスを見せてください!!」

ぐいぐいと近付いて来るシャーリーの迫力に思わず後退りしてしまった。話を聞けば先程ティアナに話した『デュアルデバイス』に興味津々らしい。デバイス技師という立場からすると当然だが、如何せん押しが強い。

「デュアルデバイスを見せてください!!」

鼻息荒く眼鏡越しに怪しく光る目。正直、関わりたくはない。関わりたくはない、のだが

「……分かった。とりあえず今日の訓練が終わった後にデュアルデバイス向かうから、それまで我慢してくれ」

「ホントですか!？」

「あ、ああ」

顔をぐいと近づけるシャーリーの威圧感に完全に負けてしまった。

「ぜえったい、絶対ですよッ!!」

何度も何度も念押ししながらシャーリーはスキップしながら去っていった。余程楽しみらしい。

「すまないノア」

「構いません。正直、嫌な予感がしますが……」

どうせ何も解らないでしょう。私と“彼”にしか私の調整は出来ませんし」

一度見せておいて諦めさせたおいた方がいいだろう。変に断つて色々付き纏われるのも面倒だ。

「さて、俺らも飯にするか……昼から忙しくなるぞ?」

「望むところです」

その言葉とともにノアの姿は虚空へと消え、本体である指輪が紅く点滅した。

二人きりの話を終え、隊舎に戻してみるとエントランスの辺りに小さな人ばかりが見えた。ゆっくりと近付くとはやてを中心としたヴォルケンリッター達がズラリと整列していた。

「何かあったか？」

「いやな、せっかく遊馬兄イが帰ってきたんやから御飯一緒に食べよっかなって思てな」

何というか微笑ましいものだ。恥ずかしげに俯きげに頬を掻くはやての姿を見て、ようやく実感できた。

帰ってきたんだな、俺は

「分かった。お互いに話したいこともあるだろうしな……飯でも食べながら話すとうかが」

家とは場所じゃない。護りたいモノ、共に在りたいモノと居られる事。血でも無く、絆で固く結ばれた関係。彼女達と共に在るのは心地好い。ジンワリと胸の奥に染み込む何かに感謝しながらはやてとその隣にいたヴィーダの頭をクシャリと撫でた。

「…………おかえりなさい!!」「…………」

はにかみながらもそう声を揃える彼女達に俺も笑みを返す。

「ああ、ただいま」

俺は家族の元によやく帰ってこれた。

暖かな光（後書き）

ようやくこちらも更新できました。

焰燃ゆる・前（前書き）

遅くなりました。ご意見ご感想をお待ちしております。

焰燃ゆる・前

食事を含めて二時間の休憩の後、午後からの訓練のため新人四人となのは、俺とノア、ヴィーダが訓練所に戻った。

「それじゃあ午後の訓練を始めるけど、しっかり休めた？」

俺達の前に整列している四人に向かって確認を込めて声を掛ける。

「はい！！」と大きな声で返事をする四人だったが初めての本格的な訓練だったこともあり疲労の色は残っていた。

まあ、仕方ないか。これから彼女達はこれ以上の困難に立ち向かわないといけないのだから。

とは言え、初日なんだから少しばかり休ませてやる必要もあるだろう。

そう考えているところに、シグナムとザフィーラがやって来た。

シグナムの方はいつになく真剣な目付きで燃え盛る闘志を瞳に称え、狼スタイルのザフィーラといえば興味深げにこちらを見ていた。少し呆れもあるように感じる。

「高町、少しいいか？」

なのはのすぐそばまでやって来ると、そう声を掛けた。

「どうしたの？シグナムさん」

「訓練の前に少し時間を貰えないだろうか」

ニヤリと笑って俺へと向き直る。

「一手お願い出来ますか、師匠」

くすまない……闘いたいと言ってきかなくなてな>

呆れたような溜め息混じりの念話はザフィーラから。

<構わねえよ　ちつとばかり新人達に休憩と一緒にトップクラスの戦闘つてのを見せてやろうと思ってたしな>

「うーん、午後からの予定は決まってるんだけどなあ……」

少し難色気味のなのはの肩に手を当てる。

「流石に初日から詰め込むと後がもたんかもしれんからな。今日は一つの目標となる先を見せるのも悪くは無いんじゃないか？」

なのははしばらく考え込む。追い討ちを掛けるように耳元で囁く。

「シグナムがあの様子だと梃子でも動かんどぞ」

「うひゃあああ!？」

何故か話した途端に真っ赤に頬を染めてビクリと跳ねる。

「ん？どうかしたかよ」

「なな何、何でもないよッ！！」

「申し訳ありません、主は無意識なのですよ」

呆れ顔のノアがそう言うとなのはと二人でこそ話をしだした。まあ、なのはの慌てているのを落ち着かせるためだろう。そんな風に考えていると、何故か二人揃ってこちらを見て大きな溜め息。

「苦勞してるね、ノアさんも」

「今に始まった事ではありませんがね」

こんなに近くにいるのに何だこの疎外感

「とりあえず仕方ないから模擬戦は認めようかな。みんなにはしっかり見てもらうよ！！遊馬さんはホントに強いから」

自分の事のように誇らしげに語るなのは顔は明るく輝いてみえた。

「では始めるか？」

「今日こそ勝ってみせます！！」

「言っ たな小娘が！！」

お互いニヤリと不敵に笑い合う。

「『ソウルノア』 ！！」

「『レヴァンティン』！！」

お互いのデバイスを天に掲げ、信頼する相棒の名を叫んだ。

「『セットアップ ！！』」

お互いに六年前と変わらぬ騎士甲冑に身を包む。何故かわからないが感慨深い。哀愁というものだろうか、それとも変わらぬ思いがあることへの歡喜か、あの時から前に進み続ける目の前の剣士への期待か。

「とりあえず場所を変えるぞ」

「承知」

ふわりと浮かび上がるとゆっくりとシミュレーション施設の中央へと移動する。ステージは午前と同様に廢都市。その上空に俺とシグナムは対峙する。

「なのは合図を 」

俺はいつものように二振りの小太刀をだらりと下げる。構えらしい構えではなくあくまで自然体。

一方のシグナムは鞘に納めた野太刀の柄に右手を沿え、腰を落と

す。そこから軽く膝を緩ませ、鋭い視線でコチラを居貫く。

なるほど……本当に強くなった。

六年前の様なただただガムシヤラに前に突き進む様な焦りは微塵も無かった。

“不動”

そんな言葉を体言するかのようにとっしりとした構え。それに合わせるように纏われた魔力は大河の様な雄大さ。

「二人とも準備は良いかな？」

最終確認とばかりに俺達に視線を送る。新人達と共に残っていた面々はシミュレーション施設の端、高くそびえ立つビルの一つの屋上に移動していた。

興味津々とはかりに目を輝かせてコチラ見ているスバル、エリオ、キヤロ。俺達の一挙手一投足を見逃さないように真剣な目付きのテイアナ。

そんな様子を眺めながら頷く。

「いきます！！」

「来い！！」

俺達の様子になのはは右腕を天に掲げ

「始めエ　　！！」

戦闘の火蓋を切って落とした。

合図と同時に瞬動を使って一直線に突き進む。

高速戦闘のイロハを知らない新人達から見れば突然俺の姿が姿が消えたように見えただろう。何の分野でもそうだが素人と 熟練者の最たる違いはスピード、そして経験だ。刀を降る、そんな淡々とした少しの動作からも無駄を削ぎ落とし、技を『業』へと昇華させる。そして数少ない情報から一つの判断を導き出す、それこそが経験だ。予感が予測に変わる。

音もなく切り上げた一振りをシグナムはたった一步下がるだけで躲した。前髪数本がはらりとちぎれ飛ぶが身体に不備はない。

「はぁアアア ！！」

見切りという一つの境地。この一瞬で俺の身体は死に体だ。そこに狙い澄ました様に翻る剣撃

「居合 か。この六年で良くここまでの形にしたな、シグナム」

「それを防ぐ師匠も流石です！！」

ギリギリで体勢を整え小太刀を重ねて何とか防いだ。腕の痺れ、そして鏝ぜり合いから感じるシグナムの力は六年前とは比べものにならない程だ。

しかし勝負は始まったばかりだ。先に行く者として負けるわけにはいかない。

少しだけ荒くなった息を殺し、示し合わせた様にお互いに間合いを開けて

「オオラアアア ！！」

「せやあああ！！」

そこにあつたのは意地と誇りの舞う舞踏会。幾度の剣撃によって響く金切り音がリズムを刻む。決して力任せなどではなく洗練された体裁で幾閃もの斬撃を放つシグナム。対して怒涛の攻撃を手にした小太刀で躲し受け流し防ぎつつ、連携の合間を縫って刀を翻す。二人だけの舞踏に付け入る間など無く、舞う姿は獣の決闘にも華やかな踊りにも見えた。

「すこい……」

誰かが零した眩き。漠然とした何か。少し離れた空間で二人は舞を踊っていた。一太刀一太刀が無情な死神の鎌の様に振り抜かれる。恐怖など微塵も感じないのか二人は愉しそうに刀をかい潜り、時には防ぎ、それでもなおただただ必殺を繰り返していた。

その光景は圧倒的で破壊的で奇跡だった。ただそれを新人達は眺める。

「そんな言葉ではダメです」

新人達の傍観者の様な眩きにノアは辛辣に突き離す。

「ノア、さん？」

ノアの口から非難の言葉が出るのが意外だったのだろう。長い時間一緒にいたはずのなのはも目を見開く。

「貴方たちが見ているものはトップクラスの戦闘です。ただ驚くだけなら手品でも見ていなさい。ですが今日の前に起こっているのは貴方たちが今後　いえ、数年後立っているかもしれない死地です。見るのではなく観なさい。少しでも取り入れられるモノがあるかもしれない。そのことを理解しなさい」

煌く閃光が空を焼く。その光景を真剣な目付きで見据える新人たちだが、如何せん経験不足のせいだ。理解の範疇を超えていたため、身につける以前の状況だった。そんな新人達の様子にノアは聴こえない程度に溜息を零す。そして二人の戦闘が肩慣らしなのを理解して、新人達に向け口を開いた。

「先程、主がシグナムの目の前に突然現われましたが、あれは魔法ではありません。魔力は使うものの純粋な技術です」

その言葉に新人達はもろんなのはやザフィーラも驚きに目を見開く。

「魔法じゃないって　フェイトちゃんが良く使う『ソニックムーブ』じゃないの？」

『ソニックムーブ』高速戦闘を得意とするフェイトの良く使う身体強化に近い魔法だ。

「確かに『ソニックムーブ』に近いですが、あれは瞬動と呼ばれるものです。簡単に説明してしまえば蹴り足に魔力を集中させること

で魔力を爆発させるブーストです。大体、移動距離は3〜7m程度ですね。

瞬動の利点は瞬間的なブーストなので魔力消費が少ないこと。ただし、方向転換が出来ません。あくまで一步のスピードを上げているためです。更にそのせいで見切られれば出所を潰されたりということもあります。

対して『ソニックムーブ』ですが、身体強化の魔法なので長期的なスピード強化が出来ます。更に使用中の方向転換の自由が利きます。しかし、欠点としては魔力消費が激しいんです。更に最高速度も瞬動に劣ります。また、魔法である以上、適正が存在します。フエイトのように使える人もいれば、なのはの様に使えない人もいます。

それぞれ長短ありますが瞬動は使えて損はないでしょう」

長く話していたが、未だに二人の戦闘は拮抗状態にあった。いや正確には拮抗させていた、というのが正しいのだろう。先程から遊馬は自分から攻めようとせずにシグナムの剣閃に合わせている。

「フム、本当に強くなったな……シグナム」

「私は自分の力に答えを得ました。アナタが最後に言っていた言葉の意味を知りました。」

その答えを見せて、今日こそアナタを越えてみせる」

鏑迫り合いの体勢だったがシグナムの身体から立ち昇る魔力の勢いに押されて遊馬の身体が吹き飛ばされる。

何とか体勢を立て直し真っ直ぐシグナムを見つめる遊馬の顔には一筋の汗が流れていた。

甘く見ていた。それが遊馬の本心だった。立ち振る舞いから強くなっているだろうとは思っていた。しかし此処までとは予測していなかった。最盛期の詠春を彷彿とさせる。性別も戦闘スタイルも違う二人だが、一つの境地へと足を踏み出している。

高みへと

ならば、こちらこそそれ相応の力を見せねば礼に欠く。

「シグナム、お前の手にした答えを、見せてもらおうぞ！！
『ソウルノア』 ！」

モード『斬馬刀』

二振りの小太刀を重ねると解けるように混じり合い巨大なと表現するには強大な威圧感を示す斬馬刀へと姿を変えた。更に刀を逆手に持ち替え切っ先を足元に向けると切っ先を基点に漆黒に染まる魔法陣が浮かび上がった。

この世界で此処までの力を解放するのは初めてだ。今のシグナムになら問題ないだろう。

遊馬の思いに呼応して、魔法陣が音を立てて壊れると共に抑え付けられていた魔力が歓喜に震え溢れ出す。

「さあ、『終焉』の名の意味を知れ」

その言葉と共に遊馬の背中越しに魔法陣が現われその中心から巨人のごとき腕が内より虚空を切り裂き世界に産声を上げた。

焰燃ゆる・前（後書き）

一人暮らしをはじめて6年　ようやくネットを繋ぎました！！これで少しは更新の速度が上がってくればいいなと思います。つつです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3874m/>

夜の女神に愛を捧ぐ

2011年5月8日01時29分発行